

子規會誌

一三五号

平成二十四年
十月

第一一回 子規忌並びに法要・物故会員法要

岐蘇雜詩三十首

子規選句稿「なじみ集」について

家族の絆と極堂 三度の挫折を越えて

一

寫川 武彦 …… 三

上田 一樹 …… 二〇

二神 將 …… 三一

例会 記録

○平成二四年七月例会 (第八三四回)

七月一九日(木) 正宗寺本堂 出席者 三九名

講演「家族の絆と極堂」三度の挫折を越えて」

理事 二神 將

綿密に編集された「極堂年譜」に基づき、極堂は最初の挫折で俳人・ジャーナリストの道へ、政治家志望から新聞経営へと進むが、二度目の挫折で俳句界に復帰、更に三度目の挫折で子規顕彰に専念したこと。さらに家族宛の書簡によって、家族との絆を大切にしていたことが判明した等を、極堂への深い敬愛の念をもって語られた。(本誌に論文を掲載)

○平成二四年八月例会 (第八三五回)

八月一九日(日) 正宗寺本堂 出席者 三四名

講演「子規と古白」明治二四年を中心に」

常任理事 渡部 平人

明治二四年七月二九日付の、藤野古白宛子規自筆書簡を基に伊予郡永田村の武市庫太郎を訪問した子規が、初めて宗匠を体験したこと、訪問の経路として、市坪を詠んだ句から市坪の集落から大間渡りのコースを想定。子規と古白の交友について、書簡のやり取り、明治二四年の古白の著しい進境に触れ、子規より見た古白を「古白遺稿」の編集の面から考察。明治二四年の子規の活動及び周辺の状況から俳句開眼の誘因を探る。当時の子規は小説と俳句の両立を目指したこと、俳句分類に熱意を込めたこと等に触れ、子規は俳句の絶えざる進化、発展を求めたことに言及。明治二四年は、子規・古白にとって大きな転機であった、とした。

○平成二四年九月例会 (第八三六回) 子規忌

九月一九日(水) 正宗寺本堂 出席者 六七名

講演「子規の松風会選句稿」

副会長 和田 克司

明治二八年秋の、子規の松風会句稿本には「ふるさと」「帰りがけ」等の五種類あり、うち三回は正宗寺で開催された句会の会稿である。明治二八年九月六日の松風会俳句会稿抜萃三〇章は、昭和八年二月の火災で半焼したが、残りの稿本は適宜整えられ正宗寺に保存されている。会稿には子規自筆本と忠実な写本とがあり、写本の出現によって句稿「ふるさと」の命名は子規自身によることが判明し、「帰りがけ」と呼称した句稿として考察することが課題となったこと、子規による各句の添削の検討により、子規の会員への懇切な指導の状況が推定できること等を解明。更に、子規追吟の、自筆本と写本の綿密な対照により子規の推敲の状況を進めることができること、「ふるさと」所収の「注意」には、課題句創作上の留意点が細述されていること、自筆本があればこそ解明が可能になることもあり、自筆本を大切にし次の世代に残していきたいこと等に論を展開、子規忌に相応しい内容を熱意を込めて述べられた。

例会 案内

○一月例会 平成二四年一月一九日(月) 正宗寺本堂

講演「松風会会員我観の周辺」 子規会会員 近藤 元規

○二月例会 平成二四年二月一九日(水) 正宗寺本堂

講演「『鶏頭』を舞台に」俳人・柳瀬蓼科と阿部里雪」 子規会理事 鳥谷 照雄

○一月例会 平成二五年一月一九日(土) 石手公民館

新年懇親会

第一一回 子規忌並びに法要・物故会員法要

平成二十四年九月十九日

墓前祭

子規埋髮塔前

(午後一時)

読経

正宗寺法務統括住職

田中

義雲師

講演

「子規の松風会選句稿」

本法要

正宗寺本堂

司会

常任理事

鳶川

武彦

閉会あいさつ

松山子規会副会長

和田

克司

法要読経

正宗寺法務統括住職

田中

義雲師

○ 記念写真撮影

松山子規会会長

井手

康夫

子規遺作朗詠

吟道明教館総本部副会長

松山子規会会員

武田

峰松

献句

(五十音順)

「絶筆三句」

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水も取らざりき

菓子パンを並べて食べる瀬祭忌

汽笛鳴る坊ちゃん列車子規忌かな

心に鞭打つことあるや瀬祭忌

革新の一語を抱き瀬祭忌

横顔の子規のつむりや黍嵐

御忌待ちをるや力まぬ糸瓜たち

伊予人は子規さんと呼ぶ瀬祭忌

ねはんえや雨のいかるが子規の鐘

忌を修す子規へ献句の墨を濃く

糸瓜忌や根岸を訪ひし伊予訛

子規の忌や朝からカレー食ふ息子

昭夫

逸山

えつこ

燕子

かがり

数子

一美

鬼杞

喜久江

喜久子

紀幸

献詠披講

焼香

松山子規会常任理事

森

慎吾

正岡家ご遺族

佐伯

徹也様

松山子規会会長

井手

康夫

岐蘇雜詩三十首

一、はじめに

「岐蘇雜詩三十首」は、明治二十四年六月二十五日から七月四日までの十日間、子規が、木曾を旅して作った漢詩である。三十首の構成は、別表「韻字一覽表」の平声三十韻を押韻して、一覽表の配列に順って作っており、しかも、すべて七言律詩によつてゐる。漢詩の発音の型は、四種類あり、どの漢字も、この四種のどれかに属しており、四つのアクセントにより四声という。これに属さないものを国字といい、漚、裊、烟、峠など数多くある。

①平声—平らかな発音 ②上声—尻あがりの発音 ③去声—尻さがりの発音 ④入声—語尾がつまる発音

詩を作る場合は、平声で作ることが中心となつており、東韻のことを上平声—東韻といい、分類番号と代表韻字とを一つにして表現する。

寫川武彦

韻字一覽表

仄		平		平仄		
入声	去声	上声	平声		四声	
			下平	上平		
□	□	□	□		圈点	
業 洽	屋 沃 覚 質 物 月 曷 黠 屑 業 陌 錫 職 緝 合	諫 殺 曠 効 号 箇 禡 漾 敬 徑 宥 沁 勸 豔 陷	送 宋 絳 寘 未 御 遇 霽 泰 卦 隊 震 問 願 翰	董 腫 講 巧 皓 寄 馬 養 梗 迥 有 寢 感 琰 賺	先 蕭 肴 豪 歌 麻 庚 庚 青 蒸 尤 侵 覃 咸	東 冬 江 支 微 魚 庚 齊 佳 灰 真 文 元 寒 刪 咸

次に、七言律詩を作る時の公式について、記しておきたい。

(一)二四不同 二字目と四字目の平仄を同じにしないこと。

(二)二六対 二字目と六字目は必ず平仄を同じにすること。

但し、例外規定により、二六対を破ることを許容する場合がある。

(三) 禁下三連 下の三字の平仄を同じにしないこと。

(四) 禁四孤平 四字目を孤平×○×にしてはならない。

(五) 一・三・五不論 一・三・五字目は平仄自由、但し(一)・(四)の

原則優先

(六) 領聯の三句と四句、頸聯の五句と六句をそれぞれ対句とする。

律詩独特の約束ごとである。

(七) その他同字重出、同意重複を避ける。

例えば、岐蘇雜詩其一を例に見てみましょう。

第一句 群峰如劍刺蒼空

第二句 路入岐蘇形勝雄

第三句 古寺鐘傳層樹外

第四句 絕崖路斷亂雲中

第五句 百年豪傑荒苔紫

第六句 万里河山落日紅

第七句 欲問虎拳龍鬪跡

第八句 蕭蕭驛馬獨嘶風

第一聯＝首聯(起)

第二聯＝領聯(承)

第三聯＝頸聯(轉)

第四聯＝尾聯(結)

路字の重出はあるが、その他の原則はすべて守られている。

「岐蘇雜詩三十首」に関する諸論を拝読するに、子規漢詩の頂点をなすものとの評価で一致している。これと並行して作られた紀行文「かけはしの記」とは、趣きを異にしており、木曾の自然や風情を余す所なく、文字を縦横に駆使して表現している。明治二十五年三月二十四に内藤鳴雪の

批正を受け、四月二十一日に竹村鍛の批正を受けた後、国分青厓の刪定により、三十首のうち十五首が新聞「日本」に連載されたのである。

実に、木曾旅行より一年二ヵ月後の二十五年の八月のことであった。なお、「かけはしの記」は、岐蘇雜詩に先駆けて、五月二十七日より新聞「日本」に連載されている。次に、岐蘇雜詩三十首における評者国分青厓とは、いかなる人物なのか、それを知りたいと思いました。

二、国分青厓(一八五七—一九四四)について

「詩集日本漢詩」第二十卷解題入谷仙介より抜萃すると、以下の通りである。

青厓、名は高胤^{たかひな}、字は子美、通称は豁^{たか}、太白山人、松洲、

金橋、茗橋老隱、黙泉漁仙、石楠莊主人、敬日楼主人などと称した。安政四年生、昭和十九年歿、仙台の人、藩饗養

賢堂に学び、明治九年に上京して、司法省法学校第一期生

として入学したが、原敬^{はらけい}、加藤拓川、陸羯南、福本日南ら

とともに、薩長閥以外の諸藩出身であったので、賄征伐の

首謀者と疑われて退学させられた。地方新聞をへて、明治

二十二年に羯南の経営する新聞「日本」に入社。時事風刺

の詩、評林(批評をあつめしもの意)を紙上に掲載して、

非常な人気を博した。(中略)明治二十三年に森槐南、本田

種竹らと星社を結んだが、やがて遠ざかり、日露戦争以後は評林詩の人氣も失われ、羯南の死（明治四十年）と、それにともなう「日本」の廢刊と前後して、ほとんど詩壇の外にあるといつてよい状態になった。

大正に入つて、田辺碧堂らに請われて、詠社の盟主となり、詩壇に復歸した。これを青厓出山という。以後、多くの詩社を指導、槐南に代つて詩壇の中心となつた。（中略）晩年には漢詩界を代表して芸術院会員となつた。妻操子は虎門に在つた東京女学館の館主で、女子教育界の有力者であつた。

性格は天才肌で奔放を極めた。預けられた他人の詩稿などは、しばしば紛失したが、全く意に介さなかつた。家を一人出ると何日も帰宅しない。妻はそのために知人に葉書を出して所在を尋ねる。葉書の文面が「主人高胤事」に始まり、いつも同じなので、知人の間で高胤事といつて評判になつた。（後略）

評林は明治二十一年から明治三十九年まで、凡そ千八百餘首が發表され、明治三十年「詩董孤」（直筆してはばかる所なきを董孤の筆という）として、一卷にまとめられたものが、青厓の生前の唯一の著書であるという。内容は、時事万般を興味に任せてなで斬りにし、政府の悪政、世相の頹廢を攻撃してやまず、日本詩史におけるユニークな存在である。

本格的な詩においても、大家であることは云うまでもないが、ここでは、子規を傷む詩を紹介するに留めたい。我が家の父の蔵書の中に「青厓詩存」上下がある。この書の発行者は、青厓の孫である国分正胤（東大名誉教授）、編者は、青厓の門下木下彪（宮内庁御用掛、元岡大教授）である。ただ最も本領を發揮した明治期の詩の多くが散逸して、本書に収められていないのは惜しまれる。この書の巻八評林に、子規を傷む詩六首がある。その内三首「寥天寂」「兩淋漓」「神不死」については、加藤国安著「漢詩人子規」百十六頁に、己に読み下してある。残り三首「百千秋」「十七言」「竹里人」について、次に掲げると

「百千秋」

俳壇學識說雙優 俳壇の學識雙を説いて優なり

病入膏肓惜不寥 病膏肓に入つて惜しむらくは寥えず

太似鬼才昌谷子 太だ鬼才昌谷子に似たり

錦囊詩句自千秋 錦囊の詩句千秋よりす（るが如し）

昌谷は、唐の王族李賀（七九〇—八一六）のこと。鄭王の後、昌谷（河南の宜陽）に起居した。七歳で詩を賦し、鬼才と称された詩人である。毎朝苦吟して外出し、足弱の馬に乗り、一人の僕をつれて、古錦囊を背負わせ、得たところの詩稿をその中に投げ入れた。（新唐書列伝）という。子規の俳壇における学問や知識の優なることは、唐の詩人李賀の鬼才に比するものと惜しんでいる。李賀が二十七才

にして天折したことも、子規への思いと重なるものがある。

「十七言」

石破天驚十七言 石は破れ天も驚く十七言

子規一去與誰論 子規一たび去つて誰ととも論ぜん

學該今古深窺奧 学は今古を該え深く奥を窺い

識眞神人更溯源 識は神人を貫き更に源を溯る

漠漠愁雲橫上野 漠々たる愁雲上野に横たい

蕭蕭落日照西原 蕭々たる落日西原を照らす

幽魂長在清風底 幽魂長に清風の底に在り

修竹千竿護墓門 修竹千竿墓門を護る

子規に対する愁歎の情が心を打つ。ここでも又学識の深

きことをいいて、二人の交情のさまを思わせる。石は破れ

天も驚く十七言とは、青厓の眞骨頂なり。

「竹里人」

手把神戈闢棘榛 手ずから神戈を把つて棘榛を闢き

俳壇面目此初新 俳壇の面目此に初めて新たなり

詞源遠溯蕉門派 詞源遠く蕉の門派に溯り

紙上時題竹里人 紙上時に竹の里人と題す

天妬奇才嗟不壽 天は奇才を妬んで嗟壽からず

地傳健筆數驚神 地は健筆を伝えて数神を驚かす

招魂落日大龍寺 招魂落日大龍寺

薤露歌成淚滿巾 薤露歌成せば涙巾に満つ

子規の葬送彷彿たり。俳壇の革新に触れ、鬼才、健筆を

いい、短命を嗟く。愛惜の情涙を催すが如しである。棘榛はいばらの茂みをいい、薤露は葬を送る時の歌をいう。

三、**榮雪別草**について

木曾旅行を機に、長年温めてきた三十律創作の夢を実現した子規。その夢の発端は榮雪別草との出合いであった。その出合いは、明治十六年に溯る。子規の竹村黄塔に宛てた書簡（子規全集第十八巻書簡一の14に所載）に次の記述がある。「加藤愚叔ノ友ニ國文豁ナル人アリ 明治戊寅（明治十一年）夏共ニ富士山ニ上レリ 而メ此國文ナル人ノ詩三十七首（富士山往復ノ詩）アリ榮雪詩草ト云フ 又別ニ七律三十首アリ 之ヲ榮雪別艸ト云フ 又附録十首アリ 皆七律ナリ而メ此人ヤ本詩人ニアラズ 故ニ唯其趣向ノ面白キノミ 依テ拔萃メ續々一覽ニ供ス（此七十餘首ノ詩皆富山ナラザルナシ）」とあり、榮雪詩草二首が添えられている。

同じく黄塔宛書簡15には、榮雪詩草拔萃として、六首の記載があり、子規全集編者の奥書に「明治16年10月頃、子規書寫「隨録詩集」第二篇中に所載」とある。これら書簡により、榮雪別草の存在は勿論、この作者が国分青厓であることも、子規は熟知していたのである。続々一覽に供すとの記述から、黄塔宛にはより多くの書簡が送られたであ

ろう。しかしながら、二つの書簡以外に見当たらないのは残念である。

次に、皐雪別草の存在は、「随録詩集」と「富士のよせがき」に現れる。随録詩集は、明治二十二〜二十四年頃、子規が中国・日本の漢詩を夜昼なく、抜き書きしたもので四編より成るとされる。第一編は、法政大学子規文庫蔵（加藤国安著漢詩人子規百十四頁）、第二・四編は国会図書館蔵、第三編は所在不明という。加藤国安先生は、国会図書館で、「随録詩集」第二編のマイクロリーダーを調べていて、作者題名不詳の「皐雪別草」を目にしたと記している。又富士のよせがきは、明治二十三年に編集された。五百木飄亭が中心となって、富士山に関する文献を抜萃したもので、「子規全集」第二十巻に、皐雪別草三十首と附録九首が録されているが、無署名である。青厓は、評林においても無署名で新聞「日本」に載せたため、羯南の作と信じられたことがある。子規も又作者の意を汲んで、作者名を明かさなかつたのであろう。

この皐雪別草の構成が、平声三十韻を押韻して作られていることに、子規が気付いたのはいつか。それは、この三十首を通読した時であろう。子規ほどの漢詩人が、気付かぬ筈がないからである。自分もいつか作つてやろうと子規の好奇心を刺激したことは間違いない。そして、皐雪別草の書寫は几辺のどこかに在つたであらう。そして、確かなも

のとして残さんと随録やよせがきに搭載したのである。勿論、青厓の力量を知り、三十律への憧れも強かつたこともある。

この富士登山については、畠中淳著「加藤拓川」に国分青厓の談話としての記述がある。一部抜萃すると、「司法省法学校に居たころの事である。陸羯南と加藤拓川と福本日南と僕の四人で、富士登山をやつた事があつた。（中略）一行中でも僕が最も強かつた。陸も亦なかなか強健であつたが、加藤は弱かつた。福本は更に弱卒であつた。（中略）其の頃最も親しいのは、我々四人と原敬とであつた。法学校を退くこととなつたのは、実につまらぬことで、よく学生共のやる賄征伐だ。発起人は富士山行きの四人だ。我等は直ちに禁足を命ぜられたが、原は我々に対する禁足処罰が不当と云ふので起つたのであつた。（後略）賄征伐とは、学校の寄宿舎で献立の不満などから寄宿生が団結して、炊事室の器物をこわしたこと。

四、岐蘇雜詩三十首について

漢詩稿記載の順序に従い、漢文には評点をそのまゝ、付した。◎は非常に良 ○良 無印は普通、勿論国分青厓の評である。読み下しは、渡部勝己先生と父城山ものを参考にした。通訳は、二句一章毎に段落を付し、漢文の意を素

直に解するようつとめた。国分青厓の評は白文なので、読み下し分とし、困難な熟語には（ ）書に解を付した。適宜註を施し参考の用に供した。

なお、其一から始まる番号の不揃いなのは、前半十五首は、新聞「日本」に掲載されたもので、国分青厓の評があるが、後半十五首は国分青厓に刪定されたものである。なお、後半十五首の通訳は次の機会に記すこととした。

岐蘇雜詩三十首

其一

群峰如劍刺蒼空 群峰劍の如く蒼空を刺し
路入岐蘇形勝雄 路は岐蘇に入りて形勝雄なり
古寺鐘傳層樹外 古寺の鐘は伝わる層樹の外
絶崖路斷亂雲中 絶崖の路は断め乱雲の中
百年豪傑荒苔紫 百年の豪傑荒苔紫に
万里河山落日紅 万里の河山落日紅なり
欲問虎拳龍鬪跡 虎拳龍鬪の跡を問わんと欲すれば
蕭蕭驛馬獨嘶風 蕭々として驛馬独り風に嘶く
岐蘇 現在の木曾をいう。長野県南西部、木曾川の上流域を占める地域。岐曾、吉祖、岐祖ともいう。

(通訳)

多くの峰々は、青い空を劍の如くに、刺し貫き、路は、漸く木曾に入りて、周囲の景色もすばらしく雄大な姿を

見せている。

古寺の鐘は、重なる樹木の外から響き来り、断崖の路は、乱雲の中へと絶えるかのようだ。

百年に一度という豪傑木曾義仲の墓も、苔荒れて紫色となり遠く万里の彼方、河も山も、落日のため紅に染まっている。

義仲が城氏と闘いし跡を訪ねんとすれば、宿場の驛馬がものさびしい声で、ひとり風に向つて嘶くを聞くのみなり。

(評)

茗橋老隱曰く。前半は形勝を紀す。後半は興廢を述ぶ。蘇峽三十里。五十六字中に括り尽す。又曰く。三十律。以て古を詠じ筆を起す。詩には一段の神韻(詩文などのすぐれたるおもむき)有り。

其四

一入蘇溪物盡奇 一たび蘇溪に入れば、物尽く奇なり
煙霞又養半生痴 煙霞又半生の痴を養う
雨穿絶壁松根怒 雨は絶壁を穿ちて松根怒り
水動巉巖佛座危 水は巉巖を動かして仏座危し
杉檜雲藏名將墓 杉檜雲は藏す名將の墓
莓苔露濕美人碑 莓苔露は湿す美人の碑
荒涼滿日向誰說 荒涼滿日向つてか説かん

華表嶺頭子規　華表嶺頭子規啼く

(通訳)

ひとたび木曾の溪谷に入れば、物皆珍しく、山河の風光のすばらしさにおろかな半生を教えてくれるようだ。

雨は絶壁を穿ちて、松の根もむき出しとなり、怒っているようだ。水は険しく高い岩を動かして、仏座も危しと見ゆるが如し。

雲が懸るほどの杉桧ある所に、義仲の墓があり、美人巴御前の石碑は露を含んだ苔に覆われている。

見わたす限り、荒れ果てたさま、誰に向つて言えばよいだろうか。鳥居（神社の鳥居を華表という）峠のほとり、時鳥の啼くを聞くばかりなり。

(評)

茗橋老隠曰く。前聯刻み尽して入神（巧妙の域に入る）す。余曾て寄人（人に身を寄せる）して北地に在り。濤は巖礁を撼かし鷲卵危しの句有り。遂に此の奇峭（山などのけわしく峙つこと）無し。天分（天与の才能）限る所。畏れざるべけんや。

其五

老樹參天暑氣微　老樹天に参わり暑氣微かなり
一籬躑躅認柴扉　一籬の躑躅柴扉を認む
鶴朝紫府夜應返　鶴は紫府に朝して夜応に返るべく

雲宿閑窓畫不飛　雲は閑窓に宿して昼飛はず
金鼎猶餘鍊丹火　金鼎猶余す鍊丹の火
苔紋空鎖釣魚磯　苔紋空しく鎖す釣魚の磯
他年若得買山隱　他年若し山を買ひ隠るを得ば
好伴夷齊共採薇　好し夷齊を伴いて共に薇を採らん

(通訳)

天に参わるように老樹が聳え、涼意ありてわずかに暑気を覚えるのみ。つつじの籬を繞れば、ようやく佗しい住居を認めるなり。

鶴は紫府（神仙の居処）に召されたのか、夜には恐らく返つて来るのだろうか。雲は静かな窓に宿りて、昼というのに動こうともしない。

金の鼎には鍊丹（長生不死の鍊薬）を作る火が、未だに残っており、付近の小川の釣魚の磯には、苔の模様が広がり、空しく鎖すかのよう。

何れの年にか、山を買ひ隠遁することがあれば、好し夷齊（伯夷・叔齊の兄弟をいう。首陽山に隠れ、薇を採つて食つた故事あり）を伴い來つて、蕨を採りたいものだ。

(評)

茗橋老隠曰く。一气折旋（まがりめぐる）。清老（俗氣を離れたける）無敵。

其六

煙火谿村影漸疎
 煙火の谿村影漸く疎なり
 寥寥古寺倚崎嶇
 寥々たる古寺倚りて崎嶇たり
 畫中詩意山濃淡
 画中の詩意山に濃淡あり
 靜裡動機雲卷舒
 静裡の動機雲に卷舒あり
 丹洞鹿馴人共坐
 丹洞の鹿馴れて人と共に坐し
 寒潭龍蟄佛同居
 寒潭の龍蟄れて仏とともに居す
 陶然醉臥空巖上
 陶然として酔いて臥す空巖の上
 夢弄仙籥躡太虚
 夢は仙籥を弄んで太虚を躡む

(通訳)

谷間の村の夕飯を炊ぐ煙も漸く疎らとなり、さびしい古寺は、崖に倚りかかるように、高くけわしく建っている。

画中詩趣を湛えんとすれば、山の姿も濃淡を以て描かれており、又静けさの切つ掛けは、雲の様子、例えば伸びたり縮んだり、消えたり長くなったりの中に、読み取ることができる。

仙境に棲む鹿は、人に馴れて人と共に坐し、水の冷たい淵に隠れている龍は、仏と同居している。

酒に酔いしれて、さびしく静かな岩の上に、うつとりと臥すと、夢は、仙人の籥の笛を弄びつつ、大空を登るかのようだ。

(評)

茗橋老隱曰く。詩品は清澹（心清く淡泊なこと）。一洗（残らず洗いますぐ）煙火の氣。此れ輞川と蘇州の者なり。静後の七字、却て是れ王文成が口吻なり。

(註)

輞川は唐の王維、蘇州は唐の韋応物をいう。王維は唐の自然詩人と称され、韋応物も又自然派の流れを汲むものである。特に王維は、その代表格とされ、山水美をえがいて、静の美を表現したことで知られる。風景画家としても良く知られ、宗の詩人蘇東波は、「彼の詩中には画あり、画中には詩あり。」と賞賛している。

子規のえがく詩境は、輞川や蘇州のえがく詩境に比すべきものと、評者はいふ。王文成は、明の哲学者王陽明をいう。時に寧王朱宸濠の乱を平定。武人としても長じ、詩文にも巧みであった。その詩は、気魄に富み、理性や意志よりも情緒を重んじた。

其七

病來意氣尚豪麤 病み来れども意氣尚豪麤
 孤劍飄蕭又客途 孤劍飄蕭又客途
 河帶寒光入濃尾 河は寒光を帯びて濃尾に入り
 山鐘秀氣滿岐蘇 山は秀氣を鐘めて岐蘇に滿つ
 峽高水急虹橋小 峽高く水急に虹橋小にして
 天隘雲深鳥道迂 天隘く雲深く鳥道迂なり

試上峰頭一長嘯。試みに峰頭に上りて一たび長嘯す
壯觀如此與誰俱。壯觀此くの如きを誰と俱にかせん

(通訳)

病に罹りて久しけれども、心意気だけは、なお、荒々しい
病に罹りて久しけれども、心意気だけは、なお、荒々しい
しい。病に罹りて久しけれども、心意気だけは、なお、荒々しい
更び旅路を行く。

河は、寒々とした景色を帯びたまま、濃尾平野に流れ
込み、山は、すぐれた景色を集めて、木曾に充ち満ちて
いる。

木曾の峡谷は、高く迫りて、水は急流となつて流れ、
これに懸かる虹橋(にじをいう)も小さいものだ。天は
山や樹に遮られて隘く、雲も深く沸き立ちて、鳥道(山路)
も遠く感じるのである。

山の頂上に立ちて、試みに一たびうそぶけば、此くの
如きすばらしい眺めを一人占め、願わくは、誰ぞと俱に
して見たいと思うばかりである。

(評)

茗橋老隠曰く。麤豪(荒々しく強い)は、李空同と解せ
ざるか。世に復君有りて其の人を采るや否や。

(註)

李夢陽。明、慶陽の人。字は獻吉。号は空洞。杜甫を尊
重したが、彼の求めるものは、感情の振幅の大きな、強
烈な詩であつた。時に内容空虚な大言杜語によつて「粗

剛」とも評された。この詩における子規の表現は、丸で
李夢陽の如くであると評者はいう。

其十

阪路羊腸幾百回 阪路羊腸幾百回
每逢奇景獨徘徊 奇景に逢う毎に独り徘徊す
亂山寒削空中劍 乱山寒やかに削る空中の劍
急峽高轟脚底雷 急峽高く轟く脚底の雷
雲棧騫驢詩裏落 雲棧の騫驢詩裏に落ち
煙林歸鳥畫間來 煙林の歸鳥画間に來る
更尋兼好曾棲處 更に兼好の曾て棲みし処を尋ねれば
落日凄風玉笛哀 落日凄風玉笛哀

(通訳)

木曾路は、坂道とつづら折りの小道ばかり、幾百回繞つ
たであらう。珍しい景觀に逢うたびに、独りうろつき眺
め明かすのである。

不揃いに聳え立つ山々は、空中の劍によつて削られた
如く。寒やかなさまを呈し、険しい峡谷の流れは、脚下
の雷の如く、高く轟いている。

雲の上にかかるかけ橋を恐る恐る渡る鈍い驢馬も、詩
興を動かし、もやの込めた林に帰つて來る鳥も、周囲の
景に溶け、一幅の画の如し。

更に、兼好法師が、還俗中に棲んでいた処を尋ねてみ

ると、落日の中、すさまじく寒い風に乗って、美しい笛の音が、聞こゆるばかりなり。

(評)

茗橋老隠曰く。前聯は杜(杜甫)に学び、後聯は王(王维)に肖る。一結凄惋(激しく驚き嘆く)す。情韻(心のおもむき)並び到る。又曰く。中底裏間等の字、稍眉目(面目)を障つ。惜しむ可し。

其十五

萬嶽群峰自別寰 万嶽群峰自ずから寰を別ち
空濛積翠撲人顔 空濛たる積翠人の顔を撲つ
僧歸茅舍枳籬外 僧は茅舎に帰る枳籬の外
人度石橋雲棧間 人は石橋を渡る雲棧の間
夢裡星霜千歲短 夢裡の星霜千歲短く
壺中天地一心閒 壺中の天地一心閒かなり
我將騎鶴尋仙去 我將に鶴に騎して仙を尋ね去かんとするも
玉闕微茫未可攀 玉闕微茫にして未だ攀ずべからず

(通訳)

重畳たる高き山々や多くの嶺々は、それぞれの世界を、自ずから別ち作っており、青山の積み重なる緑は、ほんやり暗く、人の顔を撲つかのようだ。

僧は、枳籬即ちからたちの生垣の外を通り、寺に帰って行き、人は、雲の上にかかる石造りのかけ橋を度って行く。

夢に見る歲月は、千年も束の間のように短く、ここ木曾山中は、壺中の天地(別天地をいう。後漢の時、壺公という仙人が、一つの壺を己の住家とした故事あり。)であり、心を一つにして、真に静かな境地を築しむことができる。

我は、將に鶴に騎つて仙境を尋ね行かんとすれど、仙人の住む宮殿玉闕は、模糊として見え、未だ登ることは叶わないのだ。

(評)

茗橋老隠曰く。僧歸十四字は、清峭(清くぬきでる)にして、幽迴(奥深くはるかなり)。画また到ること能わず。又曰く。自ずから、是れ君身に仙骨(仙人の骨相)あり。

其十六

龍争虎鬪此山川 龍争い虎鬪いし此の山川
古驛今餘洗馬泉 古驛今余す洗馬の泉
絶代名媛悲逝水 絶代の名媛逝水を悲しみ

千年霸業付啼鵑 千年の霸業啼鵑に付す
鬼迷破塚宵宵哭 鬼の迷う破塚宵宵に哭し

雨濕寒燐處處然 雨に湿う寒燐処処に然ゆ
一夜松風吹萬壑 一夜松風万壑を吹き

恍聞吶喊下天邊 恍として聞く吶喊し天辺を下るを

(通訳)

朝日將軍木曾義仲が、城四郎長茂との間で、龍虎の戦を操り広げたこの山川。宿場跡である洗馬の泉に、その名残りを残すなり。

戦の度に勇名を馳せた。絶世の美女巴御前も、逝く水を悲しむかのように。逝水は流れ去って止まらないが、悲しみの消えることはない。

義仲が、千年前、天下統一の野望の遂に成らざる哀れも、ほととぎすの啼く声に託するばかりなり。

死者の靈魂の迷う荒れはてた墓には、夜ごと泣き声が聞こえ、更に、雨に湿ったさびしい鬼火が、あちこちに燃えている。

一夜、松に吹く風が、多くの谷を吹き度り、関の音が、天辺から下って来て、幻影のように、恍然として聞こえるようだ。

(評)

茗橋老隱曰く。古き諸を詠じ作す。神雋れ味わい永し。皆諷誦(そらで節をつけてよむ)すべし。論、其の詩品丁卯賓客の間に在り。

(註)

唐の人許渾。字は仲晦。詩に巧。著に丁卯集がある。その中に収められた賓客の詩の間に、子規に通じる詩の品格を見たのであろう。

其十七

千重雲樹鬱岩巖。千重の雲樹鬱として岩巖。
一路盤旋入九霄。一路盤旋して九霄に入る。
人老似仙霞可吸。人は仙の似くに老いて霞吸うべく。
山奇於畫筆難描。山は画よりも奇にして筆描き難し。
夕陽閑送牧童笛。夕日閑かに送る牧童の笛。
夜月遙聞天女簫。夜月遙かに聞こゆ天女の簫。
藥草緣巖花倒發。藥草は巖に縁りて花倒に発ぎ。
馬頭風落異香飄。馬頭に風落ちて異香飄う。

(通訳)

幾重にも重なった雲をこめた樹は、鬱蒼と茂り、山は更に高く聳えており、一筋の路が、めぐりめぐりて、天に通ずるばかりと思わせる。

この地の人は、仙人の様に老いて、霞を吸うて、生きているのだろうか。山は、峻峭にして崢嶸、絵画よりも奇観を呈し、筆にては描くことが困難だ。

夕日が、山々を染めれば、しずかに送る牧童の笛声の風情を思い、皎月が山にかかれれば、遙かに聞こえる天女の簫声の気配を感じるのである。

目を転ずると、岩に着生した藥草の花が、さかしまに咲き、馬上のあたりに、風が吹き落つと共に、何とも言えぬ香りが、漂い来りて、宛ら仙山にさまようが如し。

(評)

茗橋老隠曰く。仙境の光景。刻意(懸命に)摸写。山は画よりも奇なり。則ち信なり。筆描き難し。蓋し謙辞(ひかえめなことば)のみ。

其二十

當顔亂嶽碧嵯峨 顔に当たる乱嶽碧嵯峨たり
細徑斜從鳥背過 細徑斜に從い鳥の背を過ぐ
一百長程不離峽 一百の長程峽を離れず
十餘破驛盡沿河 十餘の破驛尽く河に沿う
家山入夢路猶杳 家山夢に入るも路猶杳かに
霜露驚人秋已多 霜露人を驚かせば秋已に多し
晚叩茅扉除濁酒 晩に茅扉を叩いて濁酒を除えば
村娘唱出竹枝歌 村娘唱い出だす竹枝の歌を

(通訳)

前面の不揃いの山々は、緑に覆われ、高く突立って険しい姿で聳え、細い小路を斜に辿りて、漸く鳥居峠を過ぐ。百里に及ぶかと思われる長き道のりは、木曾の峽谷を離れることなく続き、十余の驛駅は、すべて木曾川に沿うて栄えた跡を残している。
歩きつつ、故郷のことを夢みるが、路なお杳かに遠く、霜露が降りれば、人を驚かして、秋は己に深いと気付かせてくれる。

日落ちて、茶店に入り濁酒を頼むと、村娘が出て来て、当地のはやり歌を唱い、客心を慰めてくれたのである。

(評)

茗橋老隠曰く。爽健にして清円たり。廻かに時習(其の時世のならわせ)と異にす。

(註)

第二句鳥背過は、鳥居峠を過ぐる義とした。鳥居過とすれば、解り易いが平仄が合わないため、鳥背過としたものと思われる。

其二十五

奇寒徹骨曉稜稜 奇寒骨に徹りて曉稜々
山到信州青萬層 山は信州に到りて青万層
天近石岳濕如雨 天近くして石岩湿うこと雨の如く
寺貧雞犬瘦於僧 寺貧しくして雞犬僧よりも瘦す
入雲鳥道往疑返 雲に入る鳥道往くも返るか疑い
隔水人家呼欲聲 水を隔てる人家呼ぶべし聲えんと欲す
薄暮鐘聲穿遠樹 薄暮の鐘聲遠樹を穿ち
巖扉明滅佛前燈 巖扉に明滅す仏前の燈
鳥道 鳥のみ通うけわしき阪路

(通訳)

めずらしい寒気が、骨まで徹りて、夜明け頃は、特に厳しい寒さだ。山の姿は、信州に到ると、青さ益々青く、その青が、幾重にも重なり合っている。

天は、この山々に接するが如くに近く見え、石岩は、じつとり湿り、雨後の感あり。寺は、貧しいのだろうか。

雞や犬の様子を見るに、僧よりも瘦せてみえる。

天に通ずるか紛う鳥道を往けば、今まで来た道を返っているかと錯覚する程だ。溪谷を隔てた人家は、呼べば応えん程の距離に思われる。

薄暮の鐘声は、殷々として響き度りて、遠き樹々を穿ち、仏前の燈火は、いわやの戸びらに映じて、明滅してゐる。

(評)

茗橋老隠曰く。寺貧の七字。工なること甚だしく、妙なること甚だし。奇想にあらざ凡を超ゆ。一字だに着け得ず。三十首中、予、最も此の一句を愛す。

其二十六

萬嶽千峰欲壓頭 万嶽千峰圧頭せんと欲す

此奇誰向筆端収 此の奇誰に向つて筆端に収めん

天連三越東西圻 天は三越に連なりて東西に圻け

地界兩河南北流 地は兩河を界して南北に流る

二頃桑田數家屋 二頃の桑田數家の屋

全村蠶事一年謀 全村の蠶事一年の謀

深山別有富源在 深山別に富源の在る有り

輸出木材八十州 木材を輸出す八十州

三越 越前・越中・越後の三国。今の福井、石川、富山、新潟の四県に跨る。

輸出 車で物を移しはこび出す。

(通訳)

多くの山々、多くの峰々が、十重二十重に取り巻き、頭をおさえられるようだ。この奇勝を誰に向つて筆先に収めたらよいであろうか。

天は、三越に連なる山々によつて、東西に分たれ、地は、信濃川と木曾川との分水嶺となつて、南北に流る、界をなしている。

二首畝の桑畑の傍らには、數軒の家があり、全村養蚕により、一年の生計を立てているようだ。

深い山であるが故に、別に豊かさの源となる財を有することとなつている。それは木材であり、日本全土へ輸出することによつて、村民のやすらかな暮しを支えている。

(評)

茗橋老隠曰く。山水を記し、民俗を叙す。以て一部信(信州、越中か)の地誌に充つ可し。前聯は、杜甫の「呉楚東南に圻け、乾坤日夜に浮ぶ」に学べり。而して別に新意を出す。踏襲と剽窃(他人の詩文を盗みてわがものとするにいう)とは、自ずから別なり。故に妙なり。又曰く。数字過多は、所謂筆博士(詩中に多く数字を用いる者を嘲つていう)の者なり。

(註)

詩中、萬、千、三、兩、二、一、八、十と八つの数字を用い

ている。通常の評ならば、数字過多として辛辣な評となるであろう。青厓先生は、全句◎の評なれば、これだけ多くの数字を使つて、佳句を作り得たものだ。と評したのである。

其二十七

盤空危棧度岑崆 空に盤る危棧度るに岑崆たり
行覚白雲鞋底深 行くゆく覚ゆ白雲の鞋底深きを
古洞春秋靈藥長 古洞に春秋靈藥長じ
寒淵日夜老龍吟 寒淵に日夜老龍吟す
廢城殘壘淚多少 廢城の殘壘淚多少
黃土青苔人古今 黃土の青苔人古今
一片斷碑香碑冷 一片の斷碑香碑冷たく
宣公廟下雨淋淋 宣公の廟下雨淋々たり

(通訳)

空にとぐるを巻くように、危いかけ橋が懸り、その橋を恐る恐る度ろうとすれば、高く険しいばかりだ。行くゆく度るに、鞋底に白雲が湧き起り、その深きさまを覚ゆるなり。

古い洞穴には、長い年月に亘り、靈葉の草の生育するあり、寒い淵には、昼と夜とを問わず、老龍の吟ずる声、聞こえるようだ。

廢城の殘壘を見れば、涙流ることおびただしく、昔から今に至るまで、人はよみじの青い苔と化すものだ。

一片の古くこわれかけた石碑に、手向けた香火は、いかにも冷たく、木曾義仲公の廟下には、雨の降ること滴るが如しなり。

(評)

茗橋老隱曰く。予曾て木曾を過ぐるに、宣公廟に謁す。香煙寂寞として、荊棘(いばら)掃わず。杖を停め悵然(なげくさま)として久之す。今、此の詩を読んで、曾遊を追憶す。今昔の感に堪えず。美人の黄土(よみじ)、英雄の白骨、千古の詩人、放声一哭(一たび泣く)す。

其二十八

羊腸九曲跨羸驂 羊腸たる九曲羸驂に跨り
仙境峰巒費細探 仙境の峰巒細探を費やす
雲氣戎戎起東北 雲氣戎々として東北に起り
水聲瀾瀾走西南 水声瀾々(瀾々)として西南に走る
清猿破夢月三峽 清猿夢を破る月の三峽
白鶴唳煙秋一潭 白鶴煙に唳く秋の一潭
危棧托身蘿葛在 危棧身を托すに蘿葛在り
風流久入雅人談 風流久しく雅人の談に入る

(通訳)

曲がりくねった九まがりの路を、つかれたそえ馬の背に跨り、仙境とも思える此の山々、細かく探勝を費やす。

雲は、盛んに東北より起こり、水声は、激して西南に流れ走っている。清らかに鳴く猿の声で、揚子江の上流、

月の三峽に遊ぶ夢を破られ、白鶴は、秋の深き淵より立ちこめた霧の中で喚く。

あぶなきかけ橋に身を托すかのように、まつわりつく蘿と葛が在り、この風流なる思ひ出は、久しく高尚な心を持った人達の話の種となるであろう。

(評)

茗橋老隠曰く。清秀（きよくすぐれる）雅婉（おくゆかしく美しい）なり。危棧身を託すに蘿葛在り。芭蕉翁の句を譯す。尤も其の地に切なり。此の資糧敵る者に、作者の狡猾なる技倆を見す。呵呵（からからと笑うさま）たり。

(註)

一、芭蕉は一六八八年八月、四十五歳、信州更科で名月を賞し、更科紀行を記した。その途次、義伸びいきの芭蕉は、木曾路の印象を記すとともに、末尾に句を配している。

棧橋や命をからむつたかづら

まことに、木曾路の難所として聞こえたとおり、断崖に棧道がかかっている。見れば、つたかづらが、命の限りといった調子でからみついているが、わたしたちも、命がけの思いで、しがみつくようにして、棧橋を渡って行くことだ、という意だ。（村上春次著芭蕉の風景より）

二、四句目にある灑の字について。辞書に無きため、ごう

と読ませ、泣き叫ぶかのようにと號の字を当てる解もあるが、この意の號は、下平声四豪の韻である。韻の規則から云えば、灑の字のある場所には仄韻を当てねばならない。我が父城山曰く。「灑々（入声十一陌、水の激する声）の字を灑と誤りしならん」と。因て灑の解によつた。

其二十九

清泉日夜滴茅簷

冷氣侵入難久淹

千嶂連天富材木

十州隔海貴魚鹽

孰翁孰媪衣皆窄

不雨不雲山每霑

林鳥怪他生客到

深藏茂樹密相覘

清泉日夜茅簷に滴り

冷氣人を侵して久淹すること難し

千嶂天に連なりて材木に富み

十州海に隔たりて魚塩を貴ぶ

孰れか翁孰れか媪衣皆窄く

雨ふらず雲あらざるに山毎に霑う

林鳥他の生客の到るを怪しみ

深く茂樹に蔽れて密かに相覘う

(通訳)

清らかな泉の水が、昼も夜も終日茅葺きの軒端に滴り、冷やかな気は、人を侵して、久しくその場に留まることも難しいほどだ。

多くの高く険しい山々は、天に連なつて、良質の木材を豊富に産し、十州に及ぶ信州の地は、海を隔つこと遠く、魚や塩を貴重な物としてきた。

熟れの翁か、熟れの婆か、衣服は、すべて質素でゆとり無く、雨もふらず、雨雲の一つもなくとも、山は、常にしつとりと霑っている。

林中に棲む鳥は、その初めての客がやって来るのを怪しみ、茂れる樹間の奥深く、密かに覗いて見ている。

(評)

茗橋老隠曰く。後半纖巧(こまかくたくみ)を失す。機趣(ばねの如きおもむき)余り有るも、神韻(すぐれたおもむき)足らず。但、千嶂・十州の一聯(律詩の対句)は、雄勁(おおしくつよし)にして質実(かざり気なくまこと)なり。岐蘇雜詩中此の一詩を無しとすべからず。

(註)

主人別号瀨祭書屋、見(現)に大学に在り。俳句を以て聞こゆ。料らずも、其の能詩(詩をうまく作る人)此に到る。集中(詩集のうち)を閲す。奇句警句(短くしてすぐれたる句)雑然として粉出。瑕瑜(美点と欠点)互に見ゆ。今、其の複なるを刪る者、十又五首存す。其の詩、則ち清健(きよくすこやか)にして跌宕(しまりがなくてほしいまま)、時流を超出す。卒爾(慌ただししさ)なる操觚者(文筆を業とするもの)及ぶべきに非ず。嘆賞之餘、妄りに批圈(批評と文章の妙所・要所を示すために其の傍に打つ円い点)を加う。高恕(高いおもいやりの心)を幸い乞うなり。

茗橋老隠付記す。

五、おわりに

この岐蘇雜詩が作られた明治二十五年、子規は、小説の挫折を機に、俳句への傾倒を一段と強め、俳句革新へと突き進まんことを、明確にした年でもある。一方、俳句に熟中するあまり、六月の学年試験に落第し、大学を中退、十二月には新聞「日本」に入社した年でもある。

俳句へと軸足を移しつつも、得意分野である漢詩に対する執着心も生じたのである。推敲に推稿を重ね、時間をかけて作った自信作であった。兄事する青厓の「清くすこやかで、自由奔放、時代を超越した作は即席の文学者など遠く及ぶところでない」との評を受けながら、三十首のうち半数を刪られたのである。国分先生の刪定には素直に応じたものの、雞肋の感あり、棄却するに忍びずとして残り十五首を漢詩稿に残したのも、子規の子規らしいところかも知れない。

今回、榮雪別草や岐蘇三十首に接し、私もいずれの日に、三十律に挑戦したいと思いつつ、終りたい。

(平成二十三年十二月例会講演 常任理事)

◎短信 秋田における露月生誕百四十年

石井露月、本名祐治、明治六年（1873年）秋田県女米木村生れ。昭和三年（1928年）没。子規の高弟、碧梧桐、虚子に並び、弘前の佐藤紅緑と共に、四天王と呼ばれた。医を志し、終生郷土に生きたが、俳句にも生きた。子規没後は、鳴雪を重んじ、赤木格堂、村上露月とも交流が続いた。露月山廬の露月山人として、早くに奥羽調を唱え、郷土を大切にした人であった。今年、生誕百四十年を迎えた。

記念事業は、「露月とその時代」を主題として、市内中心部の赤れんが郷土館で記念企画展が九月より十一月まで開催され、露月資料については、松山市立子規記念博物館の多大な協力を得て、新資料「なつかし草」をはじめ、露月書簡、露月の句を掲載した俳句会稿、「承露盤」などの資料パネルが展示された。未発表であった露石編集の「なつかし草」は、子規の狂女十句、露月、碧梧桐、虚子などの乾鮭、頭巾の句を子規が選句していた、注目すべき資料であった。ポスターには、爲山画の子規庵句会図が全面に紹介された。子規の座に一番近い位置に露月、さらに、肋骨、碧梧桐、四方太、鳴雪、虚子、紅緑と並ぶ句会的情景である。展示関連事業で、和田克司の講演「露月とその時代展 文学作品自筆の重み」、学習講座伊藤義一の「俳句

でたどる露月の一生」の三回の講座などが運営された。また、例年開催の全国俳句大会・第55回秋田市短詩型大会には、秋田県生涯学習センターでの記念講演に松山市立子規記念博物館竹田美喜館長を招いての大会となった。

着々と生誕百四十年の準備を進め、露月の句の集大成CD附の『石井露月全句集』（2009年）の刊行、さらに、露月評伝、工藤一紘『俳人 石井露月』（2011年）があった。今年、露月会文芸誌「米女鬼」特集号（2012）では遺句文集が刊行された。回誌には、露月が子規に将来を依頼した折、書いた物を寄越してくれと言われた時の句「梅咲いて狩野の一軸古びたり」とか、小日本新聞入社後に初めて子規が俳句を作ることを知ったとか、社内では、机を並べていた子規に原稿に書いては俳句を示したといった、今まで知られなかったエピソードが紹介された。「秋田魁新聞」博搜の成果である。さらに、今年度、大部の『露月宛書簡集』が刊行されようとしている。鳴雪、碧梧桐、虚子、さらには、律の書簡など、新発見資料が公開されるであろう。

営々と企画され、実行されてきた公民協力の力の背景には、限らない露月への敬慕が溢れている。露月顕彰は、文芸のみならず医業、郷土振興に邁進し、人の悲しみを受容した露月の温かい人間性に拠るところが大きい。やがて迎える子規生誕百五十年顕彰の一指針となろう。（編集部）

子規選句稿「なじみ集」について

上田 一樹

一. はじめに

平成二十一年十一月、「幻の重要文献」といわれた子規選句稿「なじみ集」が松山市立子規記念博物館（以下「子規博」）に収蔵されてから、はや三年になろうとしている。

小生は子規博の学芸員として、本資料の調査研究に係わらせていただいている。「なじみ集」の発見から収蔵に至る過程では、多くの関係各団体から購入の嘆願書をいただいた。無論、その中に「松山子規会」の名があつたことは言うまでもない。さらに本年三月には「なじみ集」を全翻刻し、解説を加えた「なじみ集」翻刻版が刊行された。ここでも「松山子規会」の和田克司副会長ならびに故長谷川孝士理事に「なじみ集」翻刻版編集会の編集員にご就任いただき、解説から研究活動に至るまで、多大なるご協力をいただいた。

本稿では、「なじみ集」の収蔵および調査研究にご理解・ご協力を賜った「松山子規会」の皆様への御礼の意味を込め、「なじみ集」の内容について紹介してみたい。

二. 「なじみ集」の形状および体裁

「なじみ集」は縦二四八mm×横一六七mm×厚さ四十八mm（閉じた状態）。三三九枚（本文三三七枚＋表紙・裏表紙、全六七四ページ）の和紙に、子規の手によって自身の「馴染み」の人物の俳句が墨書されている。成立年代は明治二十八年春、子規が日清戦争従軍のため東京を發つ三月三日までの数年をかけて編まれたと推定される。表紙には「癩祭書屋函書」の朱印があり、俳句は基本的に一頁に十句ずつ記されている。句の下段には（廿四）（廿五）のように制作年が記され、さらに明治二十六年以降の句は季節ごとに分類される。人物によっては、たとえば「子規（慶応三、九月）」のように生まれた年月が記されており、また検索を容易にするため、各頁上部の端に人名を記し、見出しを付けている。子規の凡帳面さがよく表れており、その分類・整理能力がいかに高く發揮された資料と言えるだろう。

そして「なじみ集」の収録句数は、実に四三七八句に及



上:「なじみ集」表紙

下:「なじみ集」中身(高浜虚子の頁)

んでいる(抹消・重複・未完成等を全て含む)。収録人物の総数は九十八人(詳細は三〇頁の別表を参照)。ただし、巻末に無名・失名の句が記されており、類句として欄外に江戸期の俳人・内藤丈草の句が注記される。子規の初期俳諧の師である大原其戎を冒頭に置き、常盤会寄宿舎の仲間や俳句結社「松風会」の同人など、松山出身の人物が多くを占める。さらに、俳句結社「権の友」の同人や日本新聞社の仲間、夏目漱石をはじめとする大学時代の友人など、俳句を通じた子規の豊富な人脈が反映されている。なお、人物の並びは六十八人目の「一雲(野間一雲)」から九十八人目の「石出(水落露石)」まで「いろは順」に配列される(ただし、「え」と「ゑ」は同一の並びに組み込まれる)。ここから「なじみ集」編集時の子規が大谷繞石を「ぎようせき」として、また坂本四方太を号の「しほうた(だ)」では

なく、本名の「よもた」として分類したことが判る。収録句の年代は明治二十四年から二十八年のものが明記されているが、明らかにそれ以前に作られた句も見られる。例を挙げると、大原其戎(明治二十二年没)や清水則遠(明治十九年没)の句などである。

さらに収録句の一部には、様々な評点が付されている。そのほとんどが句頭にあり、「○」「◎」「?」「」、「※」などのほか「人」「早」「太」などの漢字も見られる。和田克司氏の調査の結果、「人」は「日本人」、「早」は「早稲田文学」、「太」は「太陽」所収句であることが判明したが、掲載誌は全て明治二十九年発行であり、後年に書き入れられたものである。評点の意味および位置付けに関しては、今後更なる研究の余地があろう。

三. 予想される原資料・選句傾向

子規は「なじみ集」に句を採録するにあたり、様々な資料や文献を参考にしている。本章では、「なじみ集」編集の素材となった可能性のある資料について述べてみたい。

A. 子規あての書簡

① 下村為山の子規あて書簡

明治二十七年五月二日・九月二十九日・十一月七日の為山の子規あて書簡三通は、いずれも為山が松山滞在中に「松

風会」を指導していた時のもの。為山が東京の子規に、自身ならびに「松風会」同人の句を送った書簡であり、ここから多くの句が「なじみ集」に採られている。「なじみ集」所収の松風会員の句は、いわゆる「愚陀佛庵」時代のものが現段階で確認されておらず、これら為山の子規あて書簡の句が中心である。(拙稿「子規選句稿『なじみ集』と下村為山の子規あて書簡」、「季刊子規博だより」第三十卷二号参照)

②内藤鳴雪の子規あて書簡

明治二十六年十一月十五日・十八日の鳴雪の子規あて書簡二通は、鳴雪が関東から関西・中国地方を旅した時、旅先から子規にあてた句入り葉書。特に十一月十八日の旅中句はその全てが「なじみ集」に採録される。

③五百木飄亭の子規あて書簡

明治二十六年十二月十日の飄亭の子規あて書簡は、飄亭が京都に遊び、南禅寺や金閣寺といった名所を巡って詠んだ句を子規に送ったもの。多くの句が「なじみ集」に採録されるが、この時飄亭は京都で会った碧梧桐・虚子の句も同書簡に記しており、それらも「なじみ集」に採られている。

これら書簡中の句は、各人のほぼ同じ頁に固まって記されており、子規あて書簡が「なじみ集」の原資料となったことを示唆している。また、②・③のように実景を詠んだ句が多く記されたことも一つの特徴であろう。

B. 同時代の選句稿・選句集

①「俳諧十六家」

明治二十六年成立の「俳諧十六家」は、子規が仲間の句を選び、下村為山が各人の肖像画を描いたもの。「なじみ集」と同じく其戎から始まり、鳴雪や飄亭・新海非風や藤野古白ら同郷の俳句仲間や、伊藤松宇や森猿男ら「椎の友」の同人など、子規を含む計十六名の句を選録。子規・古白をのぞく十四名の句のほとんどが「なじみ集」所収句であることから、「なじみ集」と同時期に編まれた可能性が極めて高い。

②「案山子集」

明治二十五年ごろに成立した「案山子集」は、新海非風が仲間句を集め、春夏秋冬・季題別にまとめた句稿。明治二十三―二十五年の句が記されており、子規や非風・飄亭らの句が「なじみ集」に採られている。なお、この中に「牛夢」なる人物の句があるが、「なじみ集」からそれが為山の別号であることが判明。さらに従来為山は明治二十六年から句作したと考えられていたが、「なじみ集」の年次記載および「案山子集」の「牛夢」句により、為山が明治二十五年にはすでに子規たちと句作していたことが明らかとなった。

③「一家二十句」(初稿・再稿)

明治二十五年から二十九年ごろにかけて編まれたとされ

る「一家二十句」（初稿・再稿）は、子規が古俳人および仲間
の秀句を選んで記した資料。子規周辺の人物としては、
鳴雪・石井得中・松宇・猿男・勝田明庵・非風・飄亭・古
白・碧梧桐・虚子の句を収録。多数の句が「なじみ集」と
重複するが、ここでも古白は一句も見られない。「なじみ
集」と並行して編集されたか、もしくは「なじみ集」の参
考資料となった可能性が指摘される。

④ 『頼祭書屋俳話』附録選句集

明治二十八年に増補改訂された子規の『頼祭書屋俳話』
には、子規が仲間の句を選んだ「附録選句集」が収められ
ている。和田克司氏の調査により、ここに収録された「蕉
隱（陰）」なる人物が陸羯南であることが判明、さらに同書
掲載の羯南句が「なじみ集」所収句と重複することが明ら
かとなった。（和田克司氏「陸羯南の俳句稿と子規」、『近世文学研
究』第三号、文学史探究の会、二〇一一年十月参照）

⑤ 『俳句二葉集 春の部』

明治二十七年五月に刊行された『俳句二葉集 春の部』は、
子規が新聞「小日本」に掲載した春の句をまとめたもの。
「なじみ集」には『二葉集』所収句の句頭に評点が多く見ら
れ、各地から送られた句が「なじみ集」を經由して「小日
本」に掲載された可能性も考えられる。

C. 各種句稿・句会稿

講談社版『子規全集』第十五巻および『明治俳壇埋蔵資

料』（麻野恵三編著、昭和四十七年刊、大学堂書店）所収の各種
句稿・句会稿の中から「なじみ集」所収句が多数発見され
ている。ここからは、子規の「なじみ集」における選句傾
向の一端がうかがえる資料もあり、非常に興味深い。以下
に例を挙げる。

① 句会中の佳句を「なじみ集」に採録

子規が参加した明治二十六年三月十九日の「無題運座会
稿」、同二十七年九月九日の「虚桐送別会」、同二十八年一
月二十日の「第二会八人」などからは、子規選の佳句が集
中の「なじみ集」に採録されている。また子規は、明治
二十七年冬の碧梧桐・虚子・鳴雪の吟行記録「三吟行」に
評を入れているが、この中でも子規が佳句としたものは全
て「なじみ集」に記されている。

② 「なじみ集」との照合により一部作者や成立年次が判明
句会稿「故郷の音信」はこれまで成立年および作者不詳
とされていた。しかし「なじみ集」に同じ句が記されてお
り、この句会に鳴雪と西原五洲が参加していたことや、句
作年代が明治二十七年であることが判明した。また、明治
二十七年四月十五日に子規・古島古洲・飄亭・虚子の四名で
行われた「根岸庵競吟」は、無記名のため作者不明であつ
たが、「なじみ集」から一部作者が判明している。（拙稿「子
規選句稿「なじみ集」と古島一雄」、『季刊子規博だより』第二十九
巻四号参照）

D. その他、興味深い重複資料

①「真砂の志良辺」

松山の俳諧結社「明栄社」の機関誌。其戎・森連甫・大原其然はほとんどの句が「真砂の志良辺」と重複している。子規が「明栄社」に入り、「真砂の志良辺」を見るようになった明治二十年夏以降の号から、「なじみ集」に採られた可能性が極めて高い。(子規博竹田美喜館長の調査による)

②「山椿」

明治二十五年に五百木飄亭が仲間の句をまとめたもので、子規の評がある。「漱石全集」未収の漱石(凸凹)の「なじみ集」所収句「秋にやせて薄の原になく鶉」が「山椿」に記されており、ここから「なじみ集」に採られた可能性が高い。(平岡瑛二氏「五百木飄亭の句合『今昔花相撲』をめぐって—学生時代の子規と俳句仲間たち—」、「季刊子規博だより」第二十九卷三号参照)

③「山吹の一枝」

明治二十三年ごろに書かれた子規・非風の合作小説。小説中に子規や非風の句があり、第三回の非風の句「萩ゆれて露と花とのこぼれけり」が「なじみ集」に採られている。

④「月の都」

明治二十五年二月に成立した子規の小説。幸田露伴に批評を請うも芳しい評価が得られなかったことは有名である。小説中の子規・非風・飄亭・碧梧桐の句が「なじみ集」所収。

これらの重複資料はほんの一部に過ぎないが、子規が自分の手許にあった多種多様な資料を参考に「なじみ集」を編集したことがよくわかる。「なじみ集」は、子規の俳句革新前半期における一大選句集と言っても過言ではない。

四. 解明すべき謎

前述したように、「なじみ集」の内容や重複資料については多くの新事実が明らかとなる反面、未だに大きな謎がいくつも存在している。本章では、それら解明すべき謎について考察を交えながら紹介しておきたい。

A. 「子規全集」未収の子規句「寒山拾得賛」

子規の「なじみ集」所収句は「一家二十句」「寒山落木抄」「月の都」「案山子集」や友人との往復書簡などに確認される。中でも「菊慈童賛 九日もしらぬ野菊のさかりかな」「山姥賛 奥山や秋ハと問へバす、き哉」の句が、子規所有の二枚の紙焼写真(子規博蔵)の裏に記されていたことが調査によって判明した。これは厳島神社の絵馬「菊慈童図」「山姥図」の写真で、二句が明治二十四年作であることから、同年八月に子規が厳島を訪れた際に入手したものとと思われる。さらに「なじみ集」にはこの二句と並んで『子規全集』未収句「寒山拾得賛 しに、行くためにめしくふこじき哉」の句が記されている。『厳島絵馬鑑』(天保三年

初版、明治二十八年蓬蘆堂藏版)には、厳島神社内陣に「寒山拾得の図」が掲げられていた記録があり、三句を一連の作と考えると、新出句はこの「寒山拾得の図」を題材とした可能性もある。厳島神社宝物館からの聞き取り調査によると、「寒山拾得の図」が厳島神社にあったという記録は確認できるが、残念ながら現存はしていないとのことである。

B. 最も古い句・新しい句

「なじみ集」所収句のうち、年代が最も古い句・新しい句についても、未だ特定に至っていない。現在調査した中で最も古い句は、大原其戎の「玉苗やさすか泥にも染まぬいろ」である。これは慶応元年の其戎の歌仙中の句であるが、其戎が明治二十二年三月三十一日に没した後、子息の其然が追悼の意を込めて「真砂の志良辺」第一一四号(明治二十二年六月刊)に掲載した。「なじみ集」には其戎の二十句の最後に記されており、おそらく子規は「真砂の志良辺」から「なじみ集」に採録したのであろう(子規博竹田美喜館長の調査による)。なお、子規と同年代の友人の中で最も古い句と思われるのは、清水則遠の「螢火にひかれてまよふ土手の道」「三銭で石竹一本かへまする」の二句である。則遠は幼少期からの子規の親友であったが、明治十九年に脚氣衝心により死去した。「なじみ集」の則遠の二句は、明治十八年ごろ子規から句作を強く勧められて作ったもの(筆まかせ)明治二十三年「清水則遠氏第二」所収。編集

時期からかなり遡って記された則遠の句は「なじみ(馴染み)集」たる由縁を示すものであろう。

一方、現段階で最も新しい句は、内藤鳴雪の「悼関谷大尉 梅散て其たそかれの人寒し」(明治二十八年春)である。これは明治二十八年二月十二日、日清戦争で戦死した関谷豁陸軍砲兵大尉の追悼句である。この句は関谷が死去した二月十二日から、「なじみ集」の最終編集時期と推定される三月三日までの間に書き入れられたものと考えられる。(竹田美喜氏「内藤鳴雪の関谷大尉追悼句について」千舟学舎人脈と「海南新聞」一、「季刊子規博だより」第二十九卷二号 参照)

C. 不明人物・無名と失名

「なじみ集」の中でその本名や経歴が不明である人物として、「其齢」「仙女」「松民」「花守」「篤志」「黄木」「桂溪」「松籟」「笑門」「女月」「加享」「幸岳」「南畝」「暁宜」「筵々」「嘯月」の十六名が挙げられる。ただし、「其齢」は其戎一門を描いた「四時園社中三十六雅花月のしらべ」(子規博蔵)に同じ号の人物があり、「明栄社」同人の可能性がある。「花守」は明治二十六年九月十日に鳴雪宅で開かれた句会への参加記録があり、「笑門」は同二十七年九月九日に碧梧桐・虚子の送別句会に参加している。「桂溪」「松籟」は飄亭の「山椿」収録句が「なじみ集」に記されており、「松籟」は極堂の初期俳号に同じものがあるが、特定

には至っていない（子規博平岡瑛二学芸員の調査による）。また「幸岳」「晝亘」「筵々」は、「松風会」句稿および新聞「小日本」に句があり、「女月」は碧梧桐の別号であるが、「なじみ集」では碧梧桐とは明確に区別されている。

さらに「なじみ集」の巻末には「無名」「失名」の句が記され、「無名」の頁には「廿六、牛込会」とある。「鳴雪自叙伝」には明治二十六年ごろ、鳴雪が「牛込の宗匠たる岡本半翠氏」宅の句会に参加したと記されており、子規は鳴雪を通じて（あるいは白らが牛込会に参加して）その句会記録から「なじみ集」に句を記した可能性がある。また「失名」の冒頭には「越後北蒲原郡濁川村」とあり、子規へ句稿を送った人物が住所のみで無記名であったか、あるいは子規が名前を失念した可能性も考えられる。

D. 藤野古白未収の謎

「なじみ集」には、当時子規の最も有力な俳句仲間で、明治二十八年に自死した従兄弟の藤野古白の句が全く見られない。調査の結果、子規が句会で佳句としたにもかかわらず、「なじみ集」に記載のない古白の句が多数確認された（明治二十六年冬の「無題運座会稿」・明治二十八年一月六日の「第一会八人」など）。資料の根拠のない推測にはなるが、あるいは子規が「古白遺稿」（明治三十年五月刊）編集に用いるため古白の頁を抜き、それが「なじみ集」に戻されず現在に至った可能性を視野に入れておきたい。

E. 難読句について

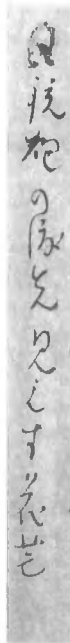
① 森連甫句「水ヒふ枝や野梅のしやれ工合」



「なじみ集」連甫の句

「真砂の志良辺」第一二三号（明治二十二年五月十二日）より重複句を発見したが、読み不明。翻刻版には仮に「みずすくふ」の読みを提案した。「なじみ集」には本段に「面白や野梅のしやれ工合」と記され、「水ヒふ枝」が上五句に併記されている。しかし「真砂の志良辺」には、「水ヒふ枝」の句形のみが見られるため、子規が「面白や」の句形を知った経緯についても継続調査を行う必要がある。

② 佐藤肋骨句「鉄炮の渡先見えす花芒」



「なじみ集」肋骨の句

字形は明らかに「渡先」だが、読み・意味ともに不明。「兵隊組」の佐藤肋骨の句であるため、当時の軍隊用語とも考えられるが、有力な手がかりは未だ掴めていない。

これらの謎については、引き続き調査研究を進めてゆく所存であるが、同時に、本稿をお読みいただいた皆様より情報をご提供いただけると幸いである。

五. 「なじみ集」からみる人間・正岡子規

A. 友との交流履歴 — 俳句革新黎明期に共に歩んだ者たち —

「なじみ集」には、これまでの子規山脈においてあまり知られていなかった人物やグループの句が多い(たとえば「樵の友」や「宇和島組」など)。一方、明治二十年代後半から子規派の核となる佐藤紅緑・寒川鼠骨・坂本四方太らは句作を始めたばかりで句数も少なく、石井露月に至っては一句も見られない。これは「なじみ集」が、子規山脈形成の過渡期に編まれた資料であることを物語る。また、「筑波会」を興した大野洒竹や旧派の林江左・石川鷺洲・松本證専など、派を超えた交流が見られることも特筆すべき事実であろう。

B. 村上露月句の評価と蕪村研究

子規は村上露月の句を大量に「なじみ集」に採録している(九十八名中第五位)。露月が新聞「日本」に投句し、子規と本格的に句作を始めたのは明治二十六年春ごろであることを鑑みると、この句数は極めて多い。露月は子規たちに先んじて蕪村調を学び、「蕪村句集」(前編上巻の写本)を鳴雪に送り、子規派の蕪村研究を支援した。「なじみ集」に記された二百を超える露月の句は、早くから蕪村に注目した露月を子規が非常に高く評価していたことを如実に物語る。

C. 類句について

「なじみ集」には欄外に類句を記した箇所が複数見られ

る。一例を挙げると、次のとおりである。

・本段の句 凧に家四五軒の煙哉 露月(廿六)

↓子規が示した句 白露に家四五軒の小村哉 規

・本段の句 炭売のつゝ、いて寒き谷間哉 碧梧桐(廿六)

↓子規が示した句 炭売のそろふて出たる峠哉 明庵

・本段の句 鷹の目の光りきびしき落葉哉 飄亭(廿四)

↓子規が示した句 鷹の目の枯野にすはる嵐哉 文章

子規自身の句から友人の句、内藤文章の句に至るまで、子規が類句に対する高い意識を持っていたことがよく分かる。これは子規が明治二十二年ごろから継続して行ってきた「俳句分類」の所産であり、自分や友人たちの句を無数に記録・記憶してきた賜物であると言えよう。

D. 新進投句者への配慮

ここでは、新聞「小日本」への新進投句者・永井英次郎(破笛)を例に挙げたい。英次郎はのちに福島の「群峰吟社」を興した子規の門人であるが、「なじみ集」には明治二十七年七月十五日、子規に初めて送った書簡中の二句「人去て蘆茂る処魚躍る」「牛高し橋の裏行秋の風」が記される。ただし後者は原句と句形が異なり、これは同年七月十七日に子規が英次郎に返信した添削句「牛行くや橋の裏吹く秋の風」の形で記されている。さらに英次郎は雅号の命名を子規に依頼しており、同年十二月三十一日の英次郎あて書簡の中で、子規はその号を「破笛」としている。しかし「な

「じみ集」から、子規は英次郎の号をはじめ「望天」とし、それを消して「破笛」としたことが判明した。添削や雅号の投句者を大切に、丁寧な指導したことが改めてよくわかる。

六、「なじみ集」の相対化 — 子規文学全体における評価 —

先に述べたように、「なじみ集」は子規の俳句革新前半期における一大選句集であるが、同時にこの資料は、子規文学全体の中で、整理・分類・編集といった特長が現れた資料の一つであるとも言える。本章では、「なじみ集」に連なって子規研究に一石を投じる可能性のある資料を挙げてみたい。

A. 子規選句稿「承露盤」との関係

「承露盤」は、子規が明治二十八年から同三十三年までの友人・知人の俳句を春夏秋冬別に選んで記したものである。同資料は講談社版『子規全集』第十六巻「解題」において、池上浩山人氏が「なじみ集」の後継の選句稿と推定している。「なじみ集」が子規博に収蔵されたことにより、二つの実物を見比べることが可能となった（ただし、「承露盤」は完本ではなく数葉の断片）。両資料には、一頁十句ずつの体裁や上部に記された「春夏秋冬」の分類、句頭にある評点の種類など、随所に共通点を見出すことができ、「承露盤」

が後継の選句稿であることが確認された。

B. 「新俳句」の基礎資料として

子規派初の本格的な選句集「新俳句」（明治三十一年三月刊）には、「なじみ集」所収句が散見される。ここから、多様な資料をもとに編集された「なじみ集」が、後年の子規派選句集を編むための原資料となった可能性を指摘することができる。それは、子規自身が「なじみ集」の重要性を認めていたことの証明と言えるのではないだろうか。

C. 後期子規資料に活かされた「なじみ集」の編集方法

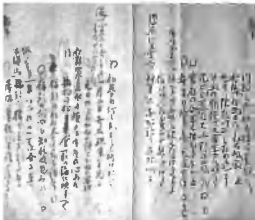
子規博所蔵の子規自選句稿「明治廿九年俳句稿」「明治三十年俳句稿」の体裁や評点の付け方などにも、「なじみ集」に準ずる一定の規則性が見受けられる。「なじみ集」の編集方針・記載方法が後年の句稿編集における種のモデルとなった可能性を指摘しておきたい。



「なじみ集」



「承露盤」



「明治三十年俳句稿」

「なじみ集」登場人物および総句数

【人物分類】

- ①. 松山の旧派俳人 ②. 郷里松山関係の友人・先輩・後輩 ③. 東京での学生仲間 ④. 日本新聞社の先輩・後輩
 ⑤. 新聞「日本」「小日本」に投稿した新進の俳人 ⑥. 俳句結社「推の友」の俳人 ⑦. 在京の宇和島出身俳人「宇和島組」の人々
 ⑧. 句作に熱中した軍人「兵隊組」の人々 ⑨. 松山の新興俳句結社「松風会」の人々 ⑩. その他 ⑪. 詳細不明

No.	「なじみ集」 の人名表記	人物名	句数	分類
1	其戎	大原其戎	20	(1)
2	連甫	森連甫	36	(1)
3	其齡		1	(11)
4	夢大	宇都宮丹雘	7	(1)
5	仙女		6	(11)
6	江左	林江左	4	(11)
7	其然	大原其然	20	(1)
8	松民		4	(11)
9	鳴雷・南塘	内藤鳴雷	583	(2)
10	得中	石井得中	68	(6)
11	桂山	石山桂山	31	(6)
12	井蛙	二宮井蛙	7	(7)
13	藪鶯	土居藪鶯	90	(7)
14	蕉雨	陸羯南	10	(4)
15	花守		2	(11)
16	篇志		2	(11)
17	静堂	桜井静堂	25	(7)
18	素香	二宮素香	74	(7)
19	孤松	二宮孤松	73	(7)
20	桃雨	片山桃雨	91	(5)
21	松宇	伊藤松宇	143	(5)
22	蟻松	武市蟻太	22	(2)
23	迷六	豊島天外	7	(2)
24	松友	三並良	1	(2)
25	鶯洲	石川鶯洲	45	(11)
26	猿男	森猿男	83	(5)
27	牛伴・牛夢	下村為山	146	(9)
28	露伴	幸田露伴	9	(11)
29	歌虎	得能歌虎	12	(3)
30	古柳	古島一雄	29	(4)
31	松窓	竹村窓	9	(2)
32	凸凹	夏目漱石	18	(3)
33	五洲	西原武雄	143	(2)
34	明庵	勝田主計	149	(2)
35	則達	清水則達	2	(2)
36	黄木		1	(11)
37	可南	伊藤可南	11	(2)
38	温	伊藤温	4	(2)
39	桂溪		1	(11)
40	松籟		2	(11)
41	一高	岩崎一高	1	(2)
42	烟霞郎	増永烟霞郎	89	(5)
43	子規	正岡子規	31	-
44	笑天	大谷是空	49	(3)
45	爛腸	田岡爛雲	32	(3)
46	紫影	藤井紫影	36	(3)
47	露月	村上露月	246	(5)
48	非風	新海非風	137	(2)
49	蛙泡	佐伯伝蔵	11	(2)
50	秀澄	戒田秀澄	1	(2)

No.	「なじみ集」 の人名表記	人物名	句数	分類
51	正綱	渡部正綱	2	(2)
52	飄亭	五百木飄亭	380	(2)
53	木岡	仙田木岡	29	(8)
54	肋骨	佐藤肋骨	11	(8)
55	笑門		2	(11)
56	墨水	梅沢墨水	34	(5)
57	可全	河東龜	127	(2)
58	種美	山崎種美	9	(2)
59	定振	松平定振	1	(2)
60	碧梧桐・青桐	河東碧梧桐	318	(2)
61	虚子	高浜虚子	373	(2)
62	愚哉	折井愚哉	50	(5)
63	紅線	佐藤紅線	19	(4)
64	蒼苔	歌原蒼苔	6	(5)
65	酒竹	大野酒竹	32	(3)
66	旭溪	遠山旭溪	7	(2)
67	狸酔	乾狸酔	97	(5)
68	一雲	野間一雲	3	(9)
69	一順	天岸一順	1	(2)
70	一宿	歌一宿	1	(9)
71	梅屋	大島梅屋	2	(9)
72	馬風	玉井馬風	1	(9)
73	破雷・望天	永井破雷	2	(5)
74	半石	国安半石	6	(9)
75	女月		11	(11)
76	加草		1	(11)
77	幸岳		2	(11)
78	甘露	佃甘露	1	(9)
79	四方太	坂本四方太	3	(5)
80	夏柳	野間夏柳	37	(9)
81	藤骨	寒川藤骨	31	(5)
82	南歌		1	(11)
83	南竹	白石南竹	2	(9)
84	陽松	久松陽松	2	(9)
85	晴夏		2	(11)
86	鏡石	大谷鏡石	3	(5)
87	永水	永木永水	1	(9)
88	鐘々		3	(11)
89	愛松	中村愛松	27	(9)
90	三風	岡村三風	6	(9)
91	奇峰	矢ヶ崎奇峰	4	(5)
92	燈亭	松本燈亭	3	(11)
93	秋竹	竹村秋竹	1	(5)
94	嘯月	山本嘯月	1	(11)
95	伸線	阪本伸線	10	(9)
96	水岡	栗田淳綱	1	(5)
97	青里	河村青里	4	(9)
98	石出	水落露石	37	(5)
-	無名		33	(11)
-	失名		13	(11)
-	内藤文章		1	-

合計 98名 4,378句

- * 人物分類については、一人の人物が複数のグループに関わる場合も多いため、あくまで便宜的なものである。
 * 人物は実際の登場順であるが、明庵・五洲・無名の収録ページは2つに分かれているため、初めて登場したところに配列している。
 * 句数は俳酒・重複・異形・未完成・欄外書き入れ等を全て含む数字である。
 * 内藤文章の1句(類句として欄外に例示)は、本表の人物の数に含めていない。

七. おわりに

本稿では紙幅の関係もあり、「なじみ集」中の句に具体的に触れることはできなかったが、「なじみ集」が今後の子規研究の鍵を握る極めて重要な資料であることを感じていただけたのではないかと思う。「なじみ集」の発見によって、これまでの子規や周辺人物の資料群が、あらゆる角度から有機的に結びついて新たな意味を持ち、子規派の俳句革新草創期の研究に一石を投じ、知られざる子規の文学活動の一端を鮮明に浮かび上がらせることとなったのである。

「なじみ集」の研究は始まったばかりであり、未だ説明すべき多くの謎がのこされている。今回はここで筆を擱くが、引き続き「松山子規会」の皆様をはじめ諸賢のご指導・ご鞭撻をいただきながら、全貌を明らかにすべく力を尽くしたい。

(平成二十四年三月例会講演 松山市立子規記念博物館学芸員)

「編集余話」

「芋煮月見会」開催

九月三十日(日)午後六時、石手公民館一階に二十数名が参集。やや雲が多く、月は顔を出さなかったものの、芋はよく煮えよき味に。「芋の用意酒の用意や人遅し 31年」井手康夫会長が吉田蔵澤の軸物等展示の準備をされたが、部屋の都合で一部しか展示できず、また改めてということになった。竹田子規博物館長から同館の企画展開連行事の紹介、烏谷照雄氏から八幡浜出身の画家川崎蘭香の企画展の案内等があった。漢詩や山頭火の句を朗詠、大きな拍手を浴びた。

(編集部)

◎お知らせ

子規会例会開催時刻の変更について

従来の午後一時の開催を、午後一時三十分に変更し、平成二十四年十月例会から実施。参加者の便宜を図っての措置で、今後、いっそう多くの参加が期待される。(編集部)

家族の絆と極堂

「三度の挫折を越えて

二 神 將

1. はじめに

私たちは色々な絆に結ばれ、守られ、悩みながら生きています。この絆の中でも「家族の絆」ほど深く強いものはありません。しかし、現在、ライフスタイルの変化により家族の絆も様変わりしています。

本日、お話しをします柳原極堂さんは、慶応三年生れ、翌年が明治元年ですから、明治と共に歩んだ人です。そして、満九十歳で亡くなりましたから、実に人生の半分が明治時代です。昔の日本人は、自分を表に出しません。恥ずべき事とっていました。極堂さんは典型的な日本人でした。そのため、今まで極堂さんが家族をどう思っていたか、よく分かりませんでした。一家の大黒柱として家族を守り、生計を立てることは当然として、家族をどのように思っていたかあまり分かりませんでした。

今回、極堂さんのお孫さんの遺族から沢山のハガキや手紙などが愛媛県生涯学習センターに寄贈され、今ままであま

り知られていなかった極堂さんの家族への思いやり、強い絆を知ることができました。また、極堂さんの父正義さんが書いた「諸用手控」は、貴重な発見になりました。これらの資料から、改めて、柳原家と極堂さんとの家族の絆に焦点を当て、極堂さんの波乱に富んだ人生を振り返って見ることにしました。

2. 極堂、最初の挫折とジャーリストへの道

そこで、極堂さんの家族との関わりを中心に極堂年譜「資料1」を作成しました。この年譜に従って説明させて頂きます。極堂さんのお父さんは今治藩士大日方好広の次男で、柳原家に養子として入り次女トシと結婚しました。次女と言っても長女が早く亡くなっているのです、実質跡取り娘です。極堂さんは、子供の頃、父から厳しく撃剣を教えられたと書いていますが、長男正春も著書『父極堂』の中で祖父は御前試合で勝ち、長州征伐に出陣した功績で大小姓格

になったと自慢していたと語っています。これらの事から父は武人であったことが分かります。

さて、この頃の士族について調べていますと正岡子規の家もそうですが、当時は、養子は実子が生まれると早く隠居し、実子に家督を相続させたようで、極堂さんも七才で柳原家を相続し戸主になっています。なお、ここでお断りしたいのは、年譜では、明治二十九年四月に子規から俳号を極堂に一方的に変えられるまでは本名の正之を使っていますが、本文では極堂を通して使っています。

極堂さんが育った時代は、松山藩が朝敵とされた事から、特に城下では厭世感に覆われていました。しかし、初代愛媛県権令として着任した土佐宿毛出身の岩村高俊は自由民権思想の下に、慶応義塾を卒業したばかりの22歳の草間時福を抜擢し教育改革や自由な政談活動を奨励し、これにより多くの青年たちも新しい日本創生に立ち向かう機運が生まれるように思います。その結果、松山中学の先輩たちに続いて、極堂や子規等も相継いで中学を中退して、東京遊学を決行しました。

そして、子規は試しに受けた東大予備門に合格しましたが、極堂さんは一向に進学できず二年が過ぎてしまいました。【資料2】を見てください。極堂さんと同じ頃上京した松山中学生十四名の状況を載せていますが、病気で帰郷した後、松山市長になった御手洗忠孝以外、目標は違つて

も大学や士官学校等に進学しています。極堂さんのみがまだ予備校生です。これを知った柳原家では心配になり、父親が子規に色々相談したようです。それが分かる書簡が二通あります。【資料3】「極堂の書簡」を見てください。一通目【書簡1】が、極堂さんに帰郷を促したことが分かる書簡です。生活費の送金を止めれば帰ってくるだろうとの思つたのですが、極堂さんは却って、意地になつて遊学を続けることを子規宛書簡に書いています。二通目【書簡2】は、自分の人生は父に乞うてでも達成するが、資金の都合もあるので海兵学校（注 江田島の海軍兵学校）進学を決めたと述べています。

これら二通の書簡の後、父親は、柳原家の危急事態として、柳原家に伝わる家宝の槍や刀、地券、銀行株など全財産を信頼できる親戚に預け、次男正博を連れて海路上京しました（東海道本線開通は明治二十二年七月）。次男を連れて行ったのは、柳原家の覚悟の現れと思われる。

今まで、家の事に一切口を挟まなかつた父が、心配のあまり、子規に相談したものの結果が思わしくなく、最後に次男正博を立会人として極堂さんの存念を確かめに遠路はるばる上京したのです。この父親の行動に、極堂さんも遂に帰国を決意したと思われれます。これらのことから父親は典型的な日本の武士の姿が垣間見られますが、極堂さんもこの父から厳しく教えられたのです。長男正春に命じた夜

【資料1】

極 堂 年 譜

年 代	年 齢	出 来 事
慶応3年(1867)	2月11日	0 正之出生。俳号極堂。三人姉弟。父今治藩士次男、養子。
明治3年(1870)	10月11日	3 弟正博生まれる。
明治7年(1874)	5月4日	7 父正義隠居、七才で家督相続、戸主となる。
明治14年(1881)	2月13日	14 勝山学校卒業。9月松山中学入学、子規と親しくなる。
明治16年(1883)	5月	16 松山中学中退し上京。共立学校(後開成学校)入学。
明治18年(1885)		18 私学「東京英語学校」設立(杉浦重剛)、正之転校。
明治18.19年頃		子規宛書簡(給費生への尽力依頼)【書簡1】
明治19年(1886)	9月	19 東京英語学校落第。
明治20年(1887)	7月19日	20 子規宛書簡(海軍兵学校入学の決意述べる)【書簡2】 保安条例制定、反政府運動家を東京から追放。
	12月25日	
明治21年(1888)	3月25日	21 父、次男正博を連れて汽船で遠路上京する。 父、正之の自活環境を整え帰松。(経費合計約120円) 政治活動に従事していたため子規とは疎遠になる。
	5月中旬	
明治22年(1889)	5月	22 進学断念、海南新聞入社【最初の挫折とジャーリストの道】
明治27年(1894)	3月	27 海南新聞主筆に就任。 自由党愛媛支部常議員に選ばれる。
	4月16日	
同 夏		俳句結社「松山松風会」入会。俳句を始める。
明治28年(1895)	3月21日	28 義兄奥村直次郎、海南新聞編集発行人となる。 子規帰郷、愚陀佛庵へ日参して写生俳句を教わる。
	8月27日	
明治29年(1896)	4月	29 子規から俳号を極堂に一方的に変えられる。 岩崎一高妹トラと結婚。
	6月	
明治30年(1897)	1月15日	30 子規の支援を得て、松山で俳誌「ほととぎす」創刊。
明治31年(1898)	3月26日	31 長男正春生まれる。 「ほととぎす」を虚子に譲り、俳句界から引退。
	9月15日	
明治32年(1899)	1月4日	32 松山市会議員に当選。以後、三選(通算4期)。 海南新聞社務に復帰。編集長となる。
	9月28日	
明治33年(1900)	10月21日	33 次男正秋生まれる。
明治35年(1902)	4月	35 実弟木原正博、海南新聞に入社、極堂を助ける。 子規死亡 34歳。東京田端・大龍寺に葬られる。
	9月19日	
明治38年(1905)	4月6日	38 母トシ死去。69歳

年 代	年 齢	出 来 事
明治39年 (1906)	1月17日	藤野政高社長と新聞編集方針が合わず、海南退社。
	2月	伊予日日新聞復刊、編集長、のち社長就任。
	5月26日	三男正繁生まれる。
大正4年 (1915)	3月25日	48 衆議院議員選挙に立候補小差で落選。政界引退。
大正5年 (1916)	1月22日	父正義死去 85歳。
大正8年 (1919)	3月19日	52 俳誌「鶏頭」に子規・漱石遺跡保存を提唱。
大正11年 (1922)		55 正春、三菱商事退社、伊豫日日新聞営業部長。
大正14年 (1925)	12月19日	58 正春の長女喜久子生まれる。初孫。
昭和2年 (1927)	3月25日	60 伊予日日廃刊し上京。【二度目の挫折と俳界復帰】
昭和3年 (1928)	3月	61 正春、関西興信所を創設、所長に就任。
	6月25日	弟正博死去 57歳。
昭和5年 (1930)	4月22日	63 正春長男、弘道生まれる。
昭和7年 (1932)	10月10日	65 俳誌「鶏頭」創刊。子規と其郷里松山連載。
昭和10年 (1935)	9月25日	68 極堂、家庭の事情で一家で東京移住を模索
昭和17年 (1942)	9月13日	75 三男正繁、病死する。35歳。
	9月30日	俳誌「鶏頭」用紙統制になり廃刊する。
	10月23日	15年間の東京生活中止。【三度目の挫折と子規顕彰】
昭和18年 (1943)	1月19日	76 村上霽月らの支援を得て松山子規会を結成。
昭和19年 (1944)	5月	77 妙清寺の柳原家の墓を整理合葬する。
昭和20年 (1945)	7月26日	78 松山空襲により子規堂焼失。
	8月	極堂自宅を長男正春に譲り、港山の観音堂に仮寓。
昭和21年 (1946)	12月24日	79 子規堂再建。次男正秋一家と子規堂に同居。
昭和24年 (1949)	6月24日	82 半切・短冊揮毫し法龍寺境内に子規庵建設移住。
昭和26年 (1951)	12月30日	84 長男正春夫婦宛書簡 (餅代送金通知) 【書簡3】
昭和27年 (1952)	2月5日	85 妻トラ死去 83歳。
	3月	初孫 (柿原) 喜久子の長男智生まれる。
	3月9日	喜久子宛はがき。(曾孫智の命名を喜ぶ) 【書簡4】
昭和28年 (1953)	4月26日	86 道後公会堂で米寿祝賀会開催、300余名列席。
昭和30年 (1955)	10月24日	88 喜久子宛書簡 (近況報告と孫の消息) 【書簡5】
明治32年 (1957)	7月1日	90 松山名誉市民第一号 10.4 初の県民賞受賞。
	10月17日	極堂死去。九十歳。

(二神 將作成)

半の城山への「落瓦拾い」なども父親から教わった子供への厳しいしつけであったのでしよう。

なお、「諸用手控」は貴重な資料なので、記録の中から参考になる面白い箇所を抜き書きしました。

【資料4 諸用手控】

「諸用手控」

明治廿一年三月二十日午後一時三津石崎え参り船間違、同廿一日午後四時頃新八幡丸にて出帆、廿二日正午神戸え着、廿二日廿四日正午出帆、廿五日東京え着、横浜直に本郷真砂町廿五番地え往（ゆく）。

○親戚に預けた貴重品

愛媛県温泉郡松山河原町 一色弥平太殿（母妹の嫁ぎ先）

所持の刀・脇差・槍鎌 各一本

地券（自宅 河原町六十二番地） 一枚

奥村直次郎殿（姉の嫁ぎ先） 預け品 数々

西原貞矩殿（母妹の嫁ぎ先） 五十二銀行株 一株

○当時の交通費

三津濱・神戸間汽船 中等 一円二十銭 荷物七十銭

神戸・横浜間汽船 四円 荷物二円二十銭

横浜・新橋間汽船 二十五銭

人力車代（新橋・神田今川小路間）二十五銭

○上京経費合計 百二十円四十七銭五厘

一円を一万円とすれば、約百二十万円です。



【資料2】

極堂の友人たちの消息

正岡子規（一八六七—一九〇二 三五）帝大文科大中退
日本新聞社員 近代俳句の父。短歌革新。

三並良（一八六五—一九四〇 七五）旧姓歌原 独逸協会学校・新教神学校卒 一高教授、松高教頭 ドイツ語權威。

竹村鍛（一八六五—一九〇一 三五）旧姓河東 碧梧桐兄 帝大文科大卒 富山房辞書編纂 東京女子師範教授。

森知之(一八六六)安長氏 陸士、陸大二期卒 陸軍歩兵大佐。仙台二九連隊長。道後湯之町長。

太田正躬(一八六七—一九三六 六九)東京高商(現一ツ橋大)卒 大阪商業教諭 のち実業界に転じる。

森盲天外(一八六四—一九三四 六九)M一三年上京、漢学塾同人社で学ぶ 余戸村盲人村長 道後湯之町長。

西原武雄(一八六四—一九四五 八一)旧姓五島 帝法科大中退 旧制中村中学校長 滋賀県長浜高校長。

御手洗忠孝(一八六六—一九四〇 七三)医学を志し上京、病氣帰郷 愛媛新報社長 県会議員 松山市長。

岩崎一高(一八六七—一八四四 七七)専修学校(現専修大)卒 衆議院議員 松山市長 県政界大幹部。

小倉脩吉(一八六七—一八九三 二六)旧姓梅木 極堂の叔母三男。明治学院卒。牧師。伝道先で水死。

白川義則(一八六八—一九三二 六三)陸士、陸大二期卒 陸軍大将 陸軍大臣 船田操兄 上海で殉職。

秋山眞之(一八六八—一九一八 四九)一中中退 海軍兵学校首席卒業 日露戦争連合艦隊参謀 海軍中将。

村上霽月(一八六九—一九四六 七六)一中中退 今出緋会社長 伊豫農業銀行頭取 県信連会長 漱石交友

山路一善(一八六九—一九六三 九四)海軍兵学校、秋山眞之と同期 海軍中将 海軍航空生みの親。

【資料3】

極堂の書簡

1. 極堂の子規宛書簡

(1) 封書なし、明治18・19年頃出されたものと推定

【書簡1】

「早々松山へかけ合ひ候處この間返辞相達し申候 其赴きにハ『内間も六ヶ敷からづと云ふにあらざれど子のためと強いて言ふなれば是非にとも言へず、故に汝がこゝろに従ふ可し、さりながら何卒心をつけて自分がどふなり都合せねハ金は最早出て申さつ云々と、又そふなる事なれば今年帰るにも及はず。何を云ふも□様の都合を考へる事故其地に留る都合なればそれでよし、何とぞ氣を付けて萬事後悔せぬことこそ願う事なり』。最早一二ヶ月の中ニハ米びつに、はなれる事なれハどこかに早くかたづけねばならぬ身ニ御坐候間何卒兄の力にてても其のすじ役人へ通しもするものなれハなり丈御尽力被下候度候。之れ偏に奉願候。」

(2) 明治二〇年七月一九日に出された書簡 【書簡2】

扱(さて) 御状によれば拙父御館をけがし候よし憚り多き事に御坐候。・・さて其節拙父が何と申せしか知らねども私はなり丈細則ニ至テハ父の命ニ之レ従ふといへども去否(きよひ) (注 拒否) の處に至てはあくまで

父に乞ふて私の志を達たくぞ断念し侍る。(略)而し資金の都合もあり亦余の思わくもあり断念、大学はやめにして海兵学校ニ針路を取り一生の航海ヲ定メント決定致候・・・喜久馬」。

2. 極堂の家族に宛てた書簡

(1)長男正春・邦枝夫妻宛手紙(昭和二六年二月三〇日)

【書簡3】

「年の瀬愈押しつみました御多用のこと、存じます、めでたく御加歳なさいませ当方御承知通り一同無事婆さんもどうやら今年八歳を重ね得るらしい僕ハ此一週間ほど前から元氣になつて毎日働いてをります八十六翁としてハまづ達者な方であります。

明日は妙清寺へ墓詣りにも行くつもりでゐます何分丸山墓地までハあるけませんから御無沙汰しますから此封書の中へいさゝかではあるが一千元入れてをきました、おもちでもおつきの時の足しにしてください。

十二月三十日 正之 邦枝どの 正春どの」

(2)初孫柿原喜久子(柳原正春長女)宛ハガキ(昭和二七

年三月九日)

【書簡4】

「智(サトシ)」と命名されたさうですね名詮自称(みゅうせん・じしょう)【注】仏教語で、名は体を表わす」

とか云ふ通り知恵者になりてくれる様祈ります智の上に徳がなくてハ大人物にはなれぬ、何卒智徳兼備の人物に育て、ください。お爺さんはかげながらそれを祈つてゐます。ウブギを粗末ながら贈りたいと思つて今夕正秋と相談してをいた。正秋と二人協同で送るやう明日頃まさ子が港町へ買いに行く筈です母子共健全と小川のみき子さんから報知あり安心して喜こんでゐます。春寒もだいぶんやはらぎかけたが御用心なさい。三月八日夜 松山市豊坂町 柳原正之

尼ヶ崎市濱田崇徳院 柿原英夫様方柿原喜久子さま」

(3)柿原喜久子宛手紙(昭和三〇年一〇月二四日)

【書簡5】

「暑い暑いといつてるうちに秋涼の好季節となり誠に好い時候だなど称してゐるうちに早くも朝寒夜寒肌寒を覚へて冬近の感がする光陰げにも矢の如く迅ハモウすぐ年の暮が来る来春は僕ハ九十歳に成る九十の爺さんでも灯火で今此の手紙を書いて居るアア元氣な方じゃ安心してくれ玉へ・・・一月前支那料理屋で塩見柳原両家による祝賀会開催云々・・・話が転ずるが今日は孝行(正春の三男)が新居浜市へ行く暇乞ひに来てくれた。これで正春方の孫共はのり子を残してスツカリ片がつき正春夫婦も定めし安心したことであらう。僕は私(ひそ)か

に是等孫共の将来を祝福して居る。めでたしめでたし。」

3. 極堂、二度目の挫折と俳界復帰

年譜を見てください。極堂さんの九十年に及ぶ長い人生の中で、明治二十二年から大正十年までの三十二年間は特別な期間です。極堂さんがやりたいことをやり通し、最も輝いていた時代です。

極堂さんにとって、進学失敗は決して挫折でなく、チャンスだったのです。極堂さんには挫折という言葉が不似合わないのかも知れません。弱冠22歳の青年が、いくら演説が巧みであると言つても、愛媛県の若手言論人として知られるようになり、海南新聞編集長を経て伊豫日日新聞の社長になります。私には、松山中学時代に子規らと討論し目指していた目標が実現したとふと思つてしまいます。

しかし、極堂さんの新聞発行の目的が不偏不党、厳正中立であった事から当時主流であった政党の支援が受けられず経営的に苦しく、貧乏新聞と言われ続けました。その打開策として読者獲得のため県下で初めてのマラソン大会、相撲大会や民間飛行家坂本寿一氏による飛行実演などを開催し評判となり、やがて海南新聞、愛媛新報などと共に愛媛県の三大新聞と言われる新聞になりました。

ところが、このような状態は長く続きませんでした。大

正十年頃になると慢性的な赤字が累積し極堂さん一人ではどうにもならない事態となり、やむなく船田一雄氏の世話で三菱に就職していた長男正春を伊豫日日新聞営業部長に迎え、経営の立て直しを図つたのです。正春は、三菱商事などでも働いていたこともあり、極堂さんとは違い、合理的な考えを持っていました。正春が社長代理になつた頃から県政友会は、国政選挙に負け続け、機関誌所有が急務となり、伊豫日日新聞買収策が浮上、買収金は当時としては高額の六万円を提示され、更に社員も再雇用することなどの好条件で正春は伊豫日日社員のため父極堂と離反することになり、これに危機感をもつた極堂さんは一人で伊豫日日廃刊を決断したのでした。

これは、極堂さんにとって決定的な挫折でした。あれほど家族の絆に支えられ、貧乏に耐えていた極堂一家は分解し、極堂さんは老妻と三男正繁を連れて、夜逃げのように松山を去つたのです。この頃が、極堂さんの人生で、最も家族の絆を無くした頃でした。それほど極堂さんは追い詰めていたのです。家族を守ることもできなかつたのです。そして、極堂さんが最後に落ち着くのは、若い頃、子規らとやつた俳句の世界だったのでした。

4. 極堂、三度目の挫折と子規顕彰

極堂さんは、六十歳を越えて、俳壇に復帰してからは、苦しかった新聞経営から開放され、孫のような若い学生に囲まれ、句会や吟行に水を得た魚のように生き生きと暮らし始めました。そして子規が亡くなって三十年が経過すると子規俳句が根付き、多くの俳人や俳句愛好家が生まれているの知り、自分の役割が、これらの人たちに子規の生い立ちや俳句革新にいたる子規の姿を伝えることではないだろうかと考え、創刊した俳誌「鶏頭」に「子規と其郷里松山」を連載することになりました。この企画は評判となり、極堂の名は再び俳壇で知られるようになりました。極堂さんの東京時代は15年でしたが、その間にも、「鶏頭」を通して子規・漱石の遺蹟保存を提唱し続けました。

一方、家庭的には、極堂さんをよく助けていた弟正博が五十七歳で亡くなり、定職が定まらず心配の種だった長男正春の問題で東京移住も模索していました。しかし、極堂さんの東京居住を取りやめたのは俳人としても将来を期待していた三男正繁が35歳で急死したことでした。その上、生き甲斐にもなっていた俳誌「鶏頭」が、経済統制により雑誌用紙の調達が出来なくなりました。これらの悪条件が重なり極堂さんは、十五年の東京生活を中止して帰郷することになりました。極堂さん七十五歳の秋でした。

5. 家族の絆と平穏な晩年

極堂さんは故郷松山に帰ってからは、精力的に子規顕彰に励み、その起点となる松山子規会の結成や、子規文庫創設など、後の子規記念博物館建設のきっかけを作りました。最後の五年間は、いつも不平も言わず極堂さんを支え続けた愛妻トラさんに先立たれましたが、初孫喜久子さんの子、曾孫「智（サトシ）」らの子どもたちの成長を楽しみにし、平和な日々を送っているのです。次に、「資料3」の「極堂の書簡」に掲載している三通の手紙（【書簡3】【書簡4】【書簡5】）を読んで、極堂さんの穏やかな晩年を偲びたいと思います。

最後になりましたが、【資料5】の写真を見てください。これは、柳原家の一族に囲まれた極堂さんの写真です。昭和二十八年に道後公会堂で行われた極堂米寿記念会に集まった一族の記念写真です。愛妻トラさんは前年八十三歳で亡くなっているのではありませんが、二十四名が各地から集まりました。前列左から初孫の喜久子さん（正春長女、柿原英夫氏夫人）、邦枝さんの妹さん（山下桂太郎氏夫人）、政子さん（正秋夫人）、極堂翁、邦枝さん（正春夫人）、正春さんです。極堂さんの前にいるのが、左から孝行（正春三男）紀子（正春次女）智（喜久子長男）です。後ろの方々は、顔も分かり難いのですが、極堂さんの甥、従兄弟などの親

戚の方々のように、いずれも胸にリボンを付けています。現在、極堂さんの直接の家族は松山にいませんが、長男正春さんの子どもや孫たちが名古屋、尼崎、横浜、熊本に居られます。

極堂さんは子規堂に住むようになってからは全国から正宗寺を訪れる俳句愛好者や観光客に子規を語り、その顕彰に務めました。また、子規庵に移住してからも子規漱石の遺蹟保存、愚陀佛庵の再建に情熱を注ぎました。極堂さんの晩年は、その飾らない人柄と子規顕彰にかける情熱に多くの極堂ファンが集まり充実の日々でした。そこには家族の絆よりもっと強固な絆が生まれていたように思います。これで本日の話を終わりとさせていただきます。拙い話を長時間聞いていただきありがとうございました。

(平成二十四年七月例会講演 理事)



柳原正春(極堂長男)



木原正博(極堂実弟)



【資料5】 極堂 柳原家の一族に囲まれた極堂翁

◎ 短信 来年は樗堂二百年祭

二百年前、庚申庵を営んで、松山俳壇に貢献した栗田樗堂（寛延二・一七四九）文化一一・一八一四）を、子規も、「樗堂は松山第一、寧ろ四国第一といふべきもの」と称えて、『俳家全集』や『一家二十句』でも採り上げている。先輩村上霽月も、大正三年三月の「ホトトギス」に「樗堂の事」を掲載し、「明治以前の松山の俳人で天下に名のあるもの恐らく樗堂り」と記し、彼の連句について研究し、終焉の地広島県御手洗島（大崎下島）に、墓参に訪れている。

近年小林一茶の故郷長野県山ノ内町で、一茶連句集『日々草』第一一巻が発見され、樗堂をはじめとする松山俳壇との関係の深さが注目されてきた。

樗堂の命日一〇月四日（太陽暦）は、湯豆腐忌と呼ばれ、彼の遺志にしたがって、湯豆腐を味わいながら、樗堂を偲ぶ催しが行われてきた。

来年は樗堂の没後二百年に当たるので、数々の催しが計画されている。その第一は、愛媛でまだ一度も行われたことのない「俳諧興行」が開催される。愛媛連句連盟と庚申庵倶楽部が中心となって、ゆかりの庚申庵で古式に則って、歌仙の奉納をする。

次に子規博物館で、樗堂の遺墨展が開催される。井手康夫会長所蔵の、樗堂追悼俳諧集『蟻の道』は、樗堂が生前、

追悼句集の刊行を禁じていたために、ただ一冊手書きで作られ、後々版下に使われないように、袋綴じの内側がのり付けされているという貴重なものである。そのほかにも句集『石耕集』の原本など貴重な資料のご提供を快諾された。感謝に堪えない。全国的に資料の提供を呼びかけているが、子規会員の皆さんも、所蔵の樗堂遺墨作品があれば、ご協力いただきたい。

樗堂が生前、一切の顕彰行為を禁止していたのを、一門の俳人たちが忠実に守ったため、一時はすっかり忘れられた存在になっていたが、近年次第にその存在が見直されてきている。松山子規会でも、先輩各位に倣って、樗堂の顕彰にあたりたいと願う。（編集部）

子規会誌 第一三五号

季刊（四、七、一〇、一月）

発行日 平成二四年一〇月一九日
発行 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内
印刷所 〇一六二〇一七一一八六八
（街）二葉印刷所

電話 〇八九一九三五〇三三八

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

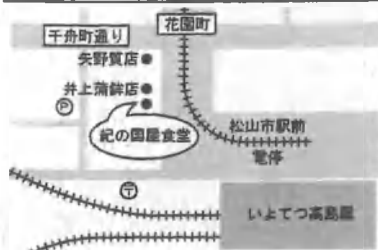
松山市道後湯之町13-7

巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

お食事処・麵処・宴会 (20名様)

紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、
ふぐ会席、猪鍋
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5

電話 945-1309

(日曜 定休日)

旬味あふれる会席をたのしみ
あふれる湯にお遊びください。

 道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707

予約専用 ☎089-941-7782(8:45~20:00) ☎0120-10-4848(8:45~20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

心を
ゆるめて
ゆつたりと



子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット
定価 58,800円

【編集委員】

栗津則雄／大岡信／長谷川耀／和田克司



四六判 上製・カバー装(各巻368頁~768頁) 定価 3,675円~3,990円 装幀 菊地信義

本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマごとの新しい編集。
- 新字・新かな表記、漢文表記には読みがなを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられるように工夫した。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

【全15巻内容】

- 第1巻 子規の三大随筆
- 第2巻 子規の青春
- 第3巻 子規と日本語
- 第4巻 子規の俳句
- 第5巻 子規の短歌
- 第6巻 子規の俳句革新
- 第7巻 子規の短歌革新
- 第8巻 子規と絵画
- 第9巻 子規と漱石
- 第10巻 子規の手紙
- 第11巻 子規の俳句分類
- 第12巻 子規の思い出
- 第13巻 子規の現在
- 第14巻 子規の一生
- 第15巻 子規と静岡

【発行】株式会社 増進会出版社

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17
TEL 055-973-7117

Z-KAI
<http://www.zkai.co.jp/>

(有) 二葉印刷所

社長 渡部 ヨシ子

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号

TEL (089) 925-0338

FAX (089) 925-2189